

一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告5

福田遺跡

沼ヶ入遺跡（1次調査）

上ノ台遺跡

2016年

福島県教育委員会
公益財團法人福島県文化振興財団
国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所

一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告 5

ふく だ 遺 跡

ぬま が いり 遺 跡 (1次調査)

かみ の だい 遺 跡

序 文

福島県教育委員会では、開発事業による埋蔵文化財の消失を避けるため、関係機関と協議を行い埋蔵文化財の保護と記録に努めています。

一般国道115号相馬福島道路は、常磐自動車道と東北縦貫自動車道を結ぶ約45kmの高規格幹線道路（自動車専用道路）であり、東日本大震災から被災地の早期復興を図るリーディングプロジェクトとして位置づけられています。震災前に国道115号バイパスとして整備されていた靈山道路と阿武隈東道路を含む福島市から相馬市までの全線が、緊急整備されることになりました。

一般国道115号相馬福島道路建設用地内には、周知の埋蔵文化財や新たに発見された埋蔵文化財包蔵地が数多く確認されており、先人が残した貴重な文化遺産が所在しております。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では、相馬福島道路建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について、開発関係機関と協議を重ね、平成19年度以降、埋蔵文化財の範囲や性格を確かめるための分布調査を行い、その結果をもとに平成25年度から現状保存の困難な遺跡については記録として保存することとし、発掘調査を実施してきました。

本報告書は、一般国道115号相馬福島道路（靈山道路、靈山～福島）の建設に伴い、平成27年度に行った伊達市靈山町下小国地区に所在する福田遺跡、沼ヶ入遺跡、上ノ台遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。この報告書を県民の皆様が文化財に対する理解を深め、地域を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習などの資料として広く活用していただければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり、御協力・御尽力いただいた国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所、伊達市教育委員会、公益財團法人福島県文化振興財團をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、感謝の意を表します。

平成28年10月

福島県教育委員会

教育長 鈴木淳一

あいさつ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の規模な開発に先立ち、開発対象地内にある埋蔵文化財の調査を実施しています。

本報告書は、一般国道115号相馬福島道路(靈山道路、靈山～福島)の建設に伴い、平成27年度に発掘調査を行った伊達市靈山町下小国地区に所在する福田遺跡、沼ヶ入遺跡、上ノ台遺跡の調査成果をまとめたものです。

福田遺跡と沼ヶ入遺跡では中世の武士階級の居住の場が発見され、とくに沼ヶ入遺跡では、陰陽道の鬼門の方角(北東)に中国渡来銭と青磁碗を埋納した掘立柱建物跡の地鎮の痕跡が確認できました。また、上ノ台遺跡では縄文時代の遺物包含層が検出され、当時の人々の暮らしぶりを考える上で貴重な成果となりました。

今後、この報告書を郷土の歴史研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、この調査にご協力いただきました国土交通省東北整備局福島河川国道事務所、伊達市ならびに地域住民の皆様に深く感謝申し上げますと共に、当財団の事業の推進についてまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成28年10月

公益財団法人 福島県文化振興財団

理事長 杉 昭 重

緒 言

- 1 本書は、平成27年度に実施した一般国道115号相馬福島道路(靈山道路、靈山～福島)遺跡発掘調査の報告書である。
- 2 本書には、以下に記す遺跡調査成果を収録した。

福田遺跡	福島県伊達市靈山町下小国字福田・桜町	埋蔵文化財番号	0721300655
沼ヶ入遺跡	福島県伊達市靈山町下小国字沼ヶ入・御渡	埋蔵文化財番号	0721300656
上ノ台遺跡	福島県伊達市靈山町下小国字玉田	埋蔵文化財番号	0721300659
- 3 本事業は、福島県教育委員会が国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所の委託を受けて実施し、調査にかかる費用は国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所が負担した。
- 4 福島県教育委員会は、発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財團に委託して実施した。
- 5 公益財団法人福島県文化振興財團では、遺跡調査部の下記の職員を配置して調査にあたった。

専門文化財主査	菅原 祥夫
文化財主査	菊田 順幸

さらに、調査期間中は臨時に下記の職員の協力を得た。

文化財主査	廣川 紀子
文化財主事	由井 文菜
- 6 本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。
- 7 本書に収録した調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 8 発掘調査および報告書の作成に際して、次の機関および個人から協力・助言をいただいた。

伊達市教育委員会	室野 秀文	菅野 崇之
----------	-------	-------

用 例

1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方 位 図中の方位は座標北を示す。方位記号の無いものは、図の真上を座標北とする。
- (2) 縮 尺 各挿図中に縮小率を示した。
- (3) ケ バ 遺構内の傾斜部は「III」の記号で表現した。
- (4) 土 層 遺構外堆積土は大文字のLとローマ数字で、遺構内堆積土は小文字のlと算用数字で表記した。
(例) 遺構外堆積土…L I・L II 遺構内堆積土…l 1・l 2
- (5) 標 高 挿図中に示した標高は、海拔高度を示す。
- (6) 遺構番号 当該遺構は正式名称、その他の遺構は記号化した略称で記載した。
- (7) 土 色 土層注記に使用した土色は、「新版標準土色帖22版」(小山正忠・竹原秀雄 1999)に基づいている。

2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 縮 尺 各挿図中に縮小率を示した。
- (2) 遺物番号 挿図ごとに通し番号を付し、本文中では下記のように省略した。
(例) 図1の2番の遺物…図1-2
遺物写真中で遺物に付した番号は、挿図中の遺物番号と一致する。
(例) 1-2…図1-2
- (3) 遺物計測値 ()内の数値は推定値、[]内の数値は遺存値を示す。

3 本書で使用した略号は、次のとおりである。

伊達市…DT	福田遺跡…FKD	沼ヶ入遺跡…NGI	上ノ台遺跡…KND
掘立柱建物跡…SB	木炭窯跡…SC	土坑…SK	溝跡…SD
遺物包含層…SH	柱穴・小穴…P	遺構外堆積土…L	遺構内堆積土…l

4 引用・参考文献は、執筆者の敬称を省略し、各編末に収めた。

目 次

序 章 遺跡の環境と調査経緯

第1節 調査経過	1
第2節 地理的環境	3
第3節 歴史的環境	5
第4節 調査方法	7

第1編 福田遺跡

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況	11
第2節 調査経過	11

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層	13
調査成果の概要(13) 基本土層(13)	
第2節 土坑	13
1号土坑(15) 2号土坑(15) 3号土坑(15) 4号土坑(17)	
第3節 溝	17
1号溝跡(17) 2号溝跡(17)	
第4節 小穴群	19
第3章 総括	20

第2編 沼ヶ入遺跡(1次調査)

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況	23
第2節 調査経過	23

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層	25
調査成果の概要(25) 基本土層(25)	
第2節 掘立柱建物跡	27
1号掘立柱建物跡(27) 2号掘立柱建物跡(29)	
第3節 土坑	31
1号土坑(31) 2号土坑(31) 3号土坑(31) 4号土坑(33) 5号土坑(33)	
6号土坑(33) 7号土坑(35) 8号土坑(35) 9号土坑(35)	

第3章 総括

第1節 沼ヶ入遺跡の1次調査でわかったこと	36
第2節 周辺遺跡との関連	38

第3編 上ノ台遺跡

第1章 遺跡の位置と調査経過	
第1節 遺跡の位置と現況	43
第2節 調査経過	43
第2章 発見された遺構と遺物	
第1節 調査成果の概要と基本土層	45
調査成果の概要(45) 基本土層(45)	45
第2節 木炭窯跡	46
1号木炭窯跡(46)	46
第3節 遺物包含層	47
概要(47) 遺物(47)	47
第3章 総括	50

挿図・表・写真目次

序章 遺跡の環境と調査経過

[挿図]

図1 一般国道115号相馬福島道路位置図	1	図3 遺跡周辺地形分類図	4
図2 道路工事計画図	2	図4 周辺の主な遺跡位置図	6

[表]

表1 周辺の遺跡一覧	7
------------	---

第1編 福田遺跡

[挿図]

図1 調査区位置図	12	図4 1・2号溝跡、2号溝跡出土遺物	18
図2 遺構配置図、基本土層	14	図5 小穴群	19
図3 1~4号土坑	16		

[写真]

1 調査区遠景	53	5 1・2号溝跡全景	55
2 調査区全景	53	6 作業風景	56
3 1~4号土坑	54	7 調査状況と出土遺物	56
4 1・2号溝跡全景	55		

第2編 沼ヶ入遺跡（1次調査）

【挿図】

図1 調査区位置図	24
図2 造構配置図、基本土層	26
図3 1号掘立柱建物跡、出土遺物	28
図4 2号掘立柱建物跡	30
図5 1～4号土坑、出土遺物	32
図6 5～9号土坑、出土遺物	34
図7 遺跡の位置関係	36
図8 関連遺跡の分布	37
図9 平場と建物配置	38
図10 狹梁掘立柱建物跡の集成	39
図11 地鎮	40

【写真】

1 調査区遠景	59
2 調査区遠景	59
3 調査区遠景	60
4 調査区全景	60
5 1号掘立柱建物跡全景	61
6 1号掘立柱建物跡全景	61
7 1号掘立柱建物跡柱穴	62
8 2号掘立柱建物跡全景	63
9 2号掘立柱建物跡柱穴	63
10 1号土坑検出状況	64
11 1号土坑全景	64
12 1号土坑全景	65
13 1号土坑断面	65
14 2～5号土坑	66
15 6～9号土坑	67
16 作業風景	68
17 調査状況と出土遺物	68

第3編 上ノ台遺跡

【挿図】

図1 調査区位置図	44
図2 基本土層	45
図3 造構配置図	46
図4 1号木炭窯跡	47
図5 1号遺物包含層出土遺物(1)	48
図6 1号遺物包含層出土遺物(2)	49

【写真】

1 調査前状況	71
2 調査区全景	71
3 1号木炭窯跡検出状況	72
4 1号木炭窯跡全景	72
5 1号木炭窯跡細部	73
6 1号木炭窯跡断面	73
7 1号遺物包含層	74
8 1号遺物包含層出土遺物	74

序 章 遺跡の環境と調査経緯

第1節 調査経過

一般国道115号相馬福島道路(図1・2)は、常磐自動車道と東北自動車道を結ぶ約45kmの高規格道路であり、東日本大震災からの早期復興を図るリーディングプロジェクトとして、国土交通省東北地方整備局により、緊急整備されている。全5区間のうち、相馬西道路と阿武隈東道路の2区間は国土交通省東北地方整備局磐城国土国道事務所が、阿武隈東～阿武隈と靈山道路と靈山～福島の3区間は同省同局福島河川国道事務所が事業を進めている。

その建設予定地に関わる遺跡発掘調査は、福島県教育委員会との委託契約に基づき、震災前の平成19年度から公益財団法人(平成24年10月以前は財団法人)福島県文化振興財団遺跡調査部が実施している。平成27年度は伊達市靈山町下小国地区に所在する以下の3遺跡の発掘調査を実施した。

◎靈山道路……福田遺跡・沼ヶ入遺跡

◎靈山～福島…上ノ台遺跡

公益財団福島県文化振興財団では、平成27年4月1日付の福島県教育委員会との委託契約を受けて、遺跡調査部の職員2名を配置して実施した。年度当初に確定していた調査遺跡と面積は、前年度の試掘調査で確認した福田遺跡1,100m²と沼ヶ入遺跡1,300m²のみである。したがって、以後の展開は、平成27年度の試掘調査で要保存面積が確定次第、順次追加していくこととなった。ただ、この段階で問題となったのは、同じ一般国道115号相馬福島道路関連事業の内、磐城国道事務所が進める塙手山トンネル掘削工事とからみ、相馬西道路の横川B遺跡の調査がきわめて高い緊急性が生じたことであった。そこで、福島県教育委員会が福島河川国道事務所、磐城国道事務所の双方と

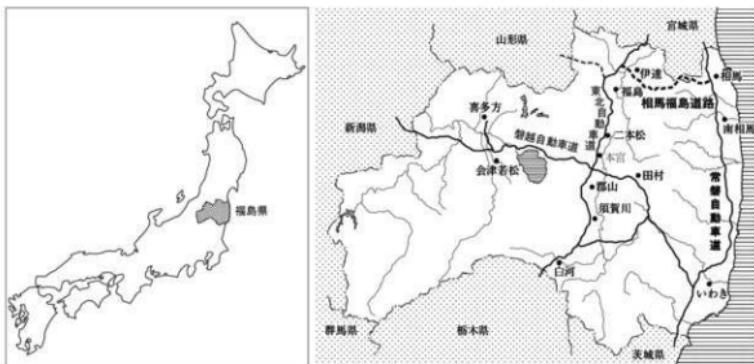


図1 一般国道115号相馬福島道路位置図

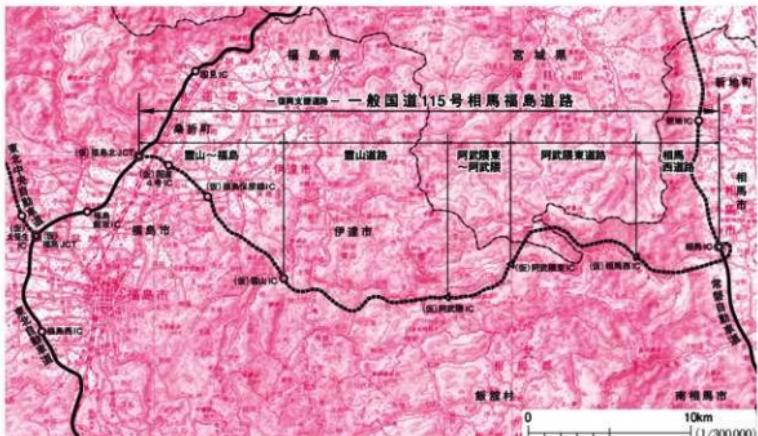


図2 道路工事計画図

調整した結果、6月までに東羽黒平遺跡(3次調査)を加えた相馬西道路の調査を終了させたのち、7月から靈山道路および靈山～福島の調査に移行することとなった。併せて、4月に行う福田・沼ヶ入遺跡に隣接するDT-B22の試掘調査で要保存面積が生じた場合はそれを最優先し、生じない場合は①福田遺跡1,100m²、②沼ヶ入遺跡1,300m²の順番で調査することとなった。

5月21日の連絡調整会議において、DT-B22の試掘調査の結果、要保存面積が生じなかっただことが、文化財側から報告された。これを受け、6月末から福田遺跡の調査を開始することが決定した。併せて、福田遺跡の北方の上ノ台館跡において、測量調査の結果、要保存面積11,000m²が確定し、要保存範囲は未試掘範囲にかなり広がる見込みであることが報告された。

さらに、6月18日の連絡調整会議では、文化財側より福田遺跡の調査が軌道に乗った段階で、沼ヶ入遺跡の調査にも着手し、両遺跡とも9月末までに調査を終了する予定が示された。また、上ノ台館跡に関しては、試掘調査による要保存面積確定後、その一部の調査に着手するには、工事側による伐採および伐木搬出などの条件整備が必要であることも要望された。

以上の経過を経て、6月29日から福田遺跡の調査を開始した。排土運搬路の板鉄敷設とプレハブ・トイレの設置の後、7月2日から重機による表土剥ぎを実施したところ、遺構の分布状況が見え始め、7月13日には人力による遺構検出を開始した。ところが、その後は記録的猛暑と降雨の日が交互に続き、作業員の出勤率が著しく低下してしまった。そのため、7月27日から表土剥ぎに着手した沼ヶ入遺跡については、表土剥ぎ終了後に、上面をシートで養生して作業をいったん中断することとした。

また、試掘調査の進展によって10月以降の予定にも変更が生じた。上ノ台館跡の北縁にかかる区域に要保存範囲900m²が生じたことから、10月以降の調査対象はこの要保存区域(上ノ台遺跡)と

し、上ノ台館跡は縄張り図を作成することとなった。以降、この最終方針に沿って作業を進めていくこととなった。

8月中旬以降は涼しくなったが、雨模様の日は続き、それでも、調査は沼ヶ入遺跡の調査へ徐々に移行していった。8月28日には、福田遺跡の実質的な調査を終了させることができ、中世特有の方形堅穴状遺構、ロクロかわらけが発見され、一定の成果を得た。

9月からは、沼ヶ入遺跡の調査に人員を集約させた。天気は相変わらず不順で、19日夜には伊達市内に甚大な豪雨被害があったものの、幸い調査自体に大きな影響は無かった。中国渡来銭と中國龍泉窯産青磁碗を埋納した掘立柱建物跡の地鎮跡が発見されるなどの成果もあり、9月30日に調査を終了し、10月5日に福田遺跡と一括で工事側へ引き渡しを行った。調査の結果、隣接する福田遺跡と沼ヶ入遺跡は、中世の一体的な遺跡であることが判明した。

上ノ台遺跡の調査は、福田・沼ヶ入遺跡の引き渡し後、工事側による伐採作業と駐車場造成の条件整備終了を待って、10月13日から開始した。調査区は高低差が激しい谷地形のため、作業員の労働災害防止にはかなり気を配らなければならなかつたが、天候が安定し、調査は順調に推移した。遺構は縄文時代の遺物包含層1ヵ所と中世以降の木炭窯跡1基であった。11月25日には実質的な作業を終了させ、26日に現地を工事側に引き渡し、本年度の発掘調査の一切を完了した。

なお、上ノ台館跡については次年度以降の発掘調査の参考とするため、縄張り図作成を11月25・26日に実施した。成果品は、次年度以降の調査報告書に収録の予定である。
(菅 原)

第2節 地理的環境

福島県は東北地方の南東端に位置し、東側は太平洋に面している。面積は13,782m²で、北海道、岩手県に次ぐ全国3番目の面積を有する。県土の約8割を山地が占め、南北に並行する越後山脈、奥羽山脈、阿武隈高地によって3地方に分割され、西から順に会津地方、中通り地方、浜通り地方と呼称されている。

伊達市靈山町は中通り地方の北東部に位置し、大半が阿武隈高地の山中にある。地形は標高825mの靈山山塊を最高峰に、標高200～500mクラスの山々が連なつておる、その谷間に東北第2位の大河川である阿武隈川に合流する広瀬川と、その支流(大石川、祓川、石田川、小国川など)が開析した狭い平坦地が形成されている。気候は夏が暑く、冬は降雪量が少ないものの寒冷で、年間平均気温は12℃、年間降水量は約110mmである。こうした土地柄を利用して、近世～近代には養蚕業・紡織物業、葉タバコ生産が盛んに行われ、1970～1980年代以降は、牧畜・段々畑・果樹栽培地への転換がなされてきた。

調査対象の3遺跡が所在する下小国地区は、標高532mの天井山北西麓から流れ出る小国川流域で、福島市と相馬市を結ぶ国道115号線(中村街道)に面し、隣接の掛田地区は国道115号線と国道349号線が南北に交差する交通の要衝地である。この地理的特性は、周囲の歴史的環境を考えるう

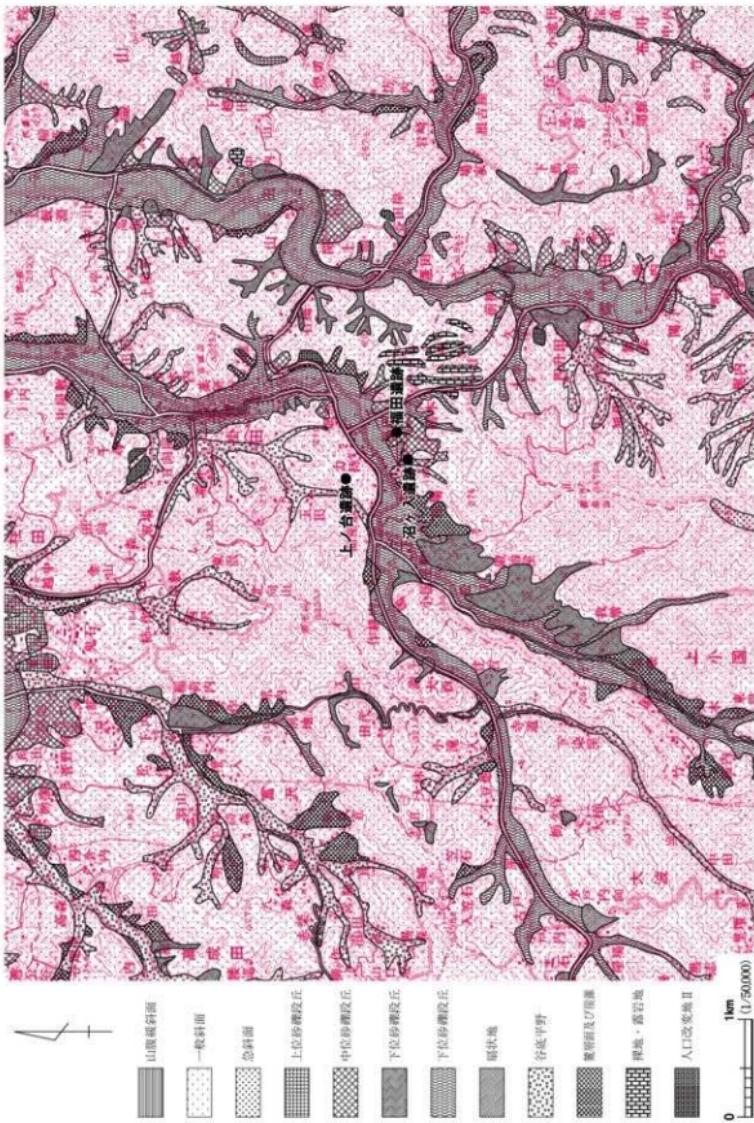


図3 遺跡周辺地形分類図

えで、重要と思われる。

次に、地質を概観する。下小国地区を含む靈山山塊の南側～西側は、風化が著しい雲母系花崗岩類を基盤層として、新第三紀の火山碎屑堆積物(靈山層、月館層など)が広く覆う。そして、高地・丘陵地間の谷部には、第四紀の未固結堆積物(岩石化していない疊・砂・泥など)が堆積し、斜面部などには、西方の吾妻・安達太良火山群からもたらされた更新世後半期の火山灰や風成二次堆積物(火山灰を母材とする黄褐色土壤)層が散在するところもある。

(音原)

第3節 歴史的環境

伊達市靈山町域では、各時代の遺跡が確認されている。以下では、時代ごとに主要な遺跡を概観してみたい。(表1)

旧石器時代 万田川遺跡(52)から、石刃と剥片が出土している。いずれも細石刃の出現以前のもとのみられている。

縄文時代 縄文時代は、早期～前期の明確な集落跡がまだ発見されていない。現状では、早期後半の土器が靈山山頂から、前期前葉の土器が川向遺跡(8)から少量出土しているのみである。しかし、中期～後期では、橋本遺跡(20)、倉波入遺跡(23)、松ヶ倉遺跡(24)、古谷地遺跡(32)篠ノ内遺跡(33)、久保田遺跡(36)、武ノ内遺跡(41)などの集落跡が確認された。とりわけ、武ノ内遺跡では中期末葉～後期の堅穴住居跡13軒、配石遺構14基、屋外埋設土器74基、土坑113基が発見されており、松ヶ倉遺跡でも縄文時代中期末葉～後期中葉の埋甕3基、土坑5基が検出されている。続く晩期はさらに遺跡数が増加する反面、遺跡の規模は小さくなっていく。川向遺跡(8)、熊屋敷B遺跡(10)、熊屋敷遺跡(11)、千石平遺跡(16)、岩平B遺跡(17)、家ノ入遺跡(18)、小坂遺跡(19)、漆宝遺跡(21)、大石台遺跡(25)、根古屋遺跡(27)、三斗蒔遺跡(38)、武ノ内遺跡(41)などが知られ、根古屋遺跡では、晩期終末の完形土器が多数出土している。

弥生時代 弥生時代になると、集落様相は不明になる。しかし、根古屋遺跡(27)と武ノ内遺跡(41)では再葬墓が認められ、縄文時代晩期と地点をずらして集落が継続したのは間違いない。根古屋遺跡で発見された弥生時代前期後半～中期前半の土器棺墓25基、土坑墓2基、土坑4基、人骨集積地2箇所、土器棺150個体は、東日本の代表的な再葬墓資料の1つと評価されている。

古墳時代 行合道B遺跡(9)から、単体で中期後葉～後期前葉の土師器甕が出土している。集落跡は発見されていない。

古代・中世 この時代を代表するのは、急峻な靈山山塊に営まれた靈山寺跡とその関連遺跡群(12～15)である。貞觀元(859)年に、慈覺大師円仁が開基したと伝えられ(「靈山寺縁起」)、南北朝期の建武四(1337)年に、北畠顕家が一時仙台平野から陸奥國府を移した当該遺跡群では、礎石建物群、溝跡、道路跡などの遺構とともに、土師器杯、須恵器甕、龍泉窯青磁花盆・皿、中世瓦、鉄製錫杖などの多種多様な遺物が発見されている。また、15世紀前半に創建された国指定史跡宮脇廬

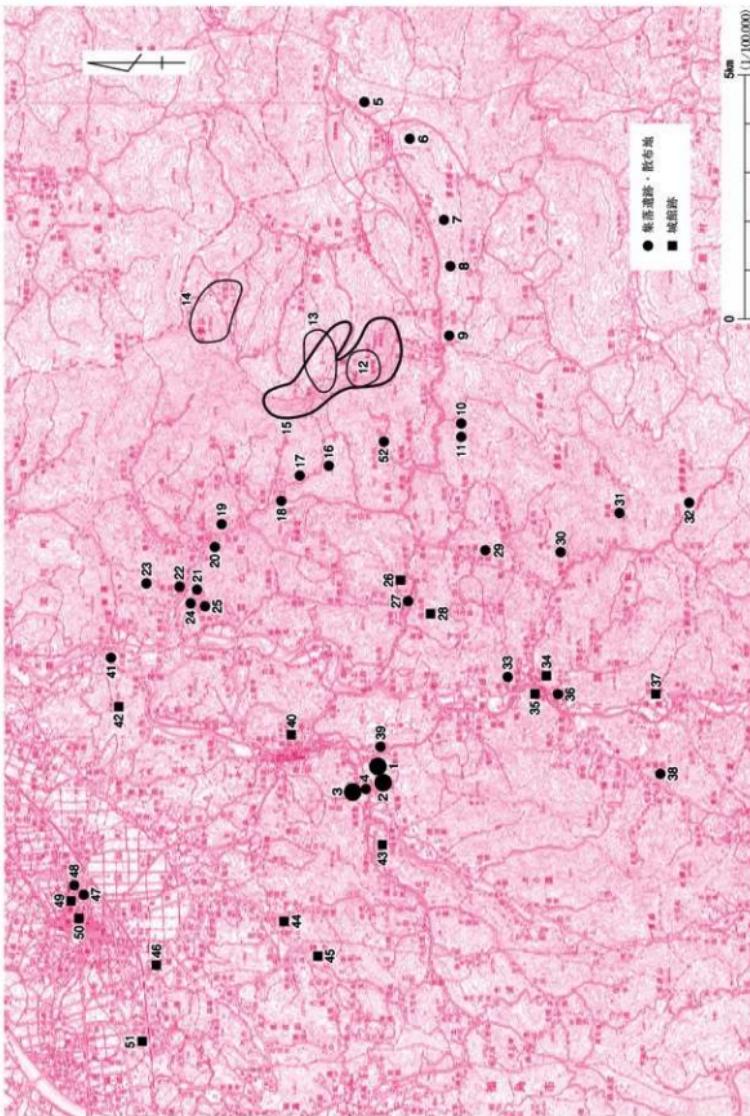


図4 周辺の主な遺跡位置図

表1 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	種別	時期	No.	遺跡名	所在地	種別	時期
1	福田遺跡	伊達市豊山町下小国	集落・城館跡	中世	27	朝内屋遺跡	伊達市豊山町石田	集落跡	（後・晚）、佐
2	沼ヶ入遺跡	伊達市豊山町下小国	集落・城館跡	中世	28	小路跡	伊達市豊山町石田	城館跡	中世
3	上ノ台遺跡	伊達市豊山町下小国	本居・物語跡	繩文、中世以降	29	宝鏡船跡	伊達市月龍町石川	塚など	縄文、～近世
4	上ノ台船跡	伊達市豊山町下小国	城館跡	中世	30	堀堤遺跡	伊達市月龍町石川	廻転関連	中世～近世
5	近ヶ上遺跡	相馬市東玉野	木炭窯	近世初	31	砂輪遺跡	伊達市月龍町石川	廻転関連	中世～近世
6	向山遺跡	相馬市東玉野	集落跡	繩文(早・前)	32	古高地遺跡	伊達市月龍町月能	散布地	縄文(前・中)
7	唐印向山遺跡	伊達市豊山町石田	木炭窯	縄文、近世	33	堀之内遺跡	伊達市月龍町石川	集落跡	縄文(中)
8	川向遺跡	伊達市豊山町石田	集落跡	縄文(後・晩)	34	月見船跡	伊達市月龍町月能	城館跡	中世
9	行合道B遺跡	伊達市豊山町石田	木炭窯	平安、中世末	35	地上船跡	伊達市月龍町月能	城館跡	中世
10	熊屋敷A遺跡	伊達市豊山町石田	集落跡・木炭窯	近世(後・中世)	36	久保田遺跡	伊達市月龍町月能	散布地	縄文(中・後)
11	熊屋敷B遺跡	伊達市豊山町石田	散布地	縄文(後・晩)	37	下手渡瀬陣跡	伊達市月龍町下手渡	神原跡	近世後期
12	靈山寺山頂御衣鉢	伊達市豊山町石田	寺院跡	古代～中世	38	三牛寺遺跡	伊達市月龍町鶴田	散布地	縄文(早・晩)
13	靈山寺玉野川上流伽藍跡	伊達市豊山町石田	寺院跡	古代～中世	39	万人冢	伊達市豊山町下小国	經塚、塚	中世～近世
14	靈山寺古山口御衣鉢	伊達市豊山町石田	寺院跡	古代～中世	40	磐田城跡	伊達市豊山町櫛田	城館跡	中世
15	靈山城跡	伊達市豊山町石田	城跡	中世(南北朝期)	41	武ノ内遺跡	伊達市豊山町私原	集落跡	（中・後）、佐
16	千石平遺跡	伊達市豊山町大石	散布地	縄文(後・晩)	42	山野川大館	伊達市豊山町山野川	城館跡	中世
17	羽平寺遺跡	伊達市豊山町大石	散布地	縄文(後・晩)	43	小国城跡	伊達市豊山町下小国	城館跡	中世
18	家ノ入遺跡	伊達市豊山町大石	散布地	縄文(後・晩)	44	熊子屋遺跡	伊達市保原町所沢	城館跡	中世
19	小坂遺跡	伊達市豊山町大石	散布地	縄文(後・晩)	45	當計城跡	伊達市保原町當計	城館跡	中世
20	横木遺跡	伊達市豊山町大石	散布地	縄文(中・後)	46	大城城跡	伊達市保原町上保原	城館跡	中世
21	唐安遺跡	伊達市豊山町大石	散布地	縄文(後・晩)	47	大内丸遺跡	伊達市保原町大丸	城館関係	中世～近世
22	引領寺跡	伊達市豊山町大石	寺院跡	中世～近世初	48	吾瀬古八重遺跡	伊達市保原町大丸	集落・城館関係	古墳～近世
23	食入遺跡	伊達市豊山町大石	散布地	縄文(中・後)	49	保原城跡	伊達市保原町城ノ内	集落・城館跡	古墳～近世
24	松ノ音遺跡	伊達市豊山町大石	集落跡	縄文(中・後)	50	保原神居跡	伊達市保原町宮下	神原跡	近世
25	大石右遺跡	伊達市豊山町大石	散布地	縄文(後・晩)	51	高内船跡(高子岡城跡)	伊達市保原町上保原	城館跡	中世
26	大船跡	伊達市豊山町石田	城館跡	中世	52	万田川遺跡	伊達市豊山町石田	散布地	旧石器

寺跡(22)は、伊達氏が再興した靈山寺跡の可能性が指摘されており、軒瓦文様には京都の鹿苑寺や相国寺の影響が確認できる。さらに、広瀬川とその支流域に戦国期の城館跡が多いのもこの地域の特徴と言え、上ノ台館跡(4)、大館跡(26)、小館跡(28)、懸田城跡(40)、山野川大館跡(42)、小国城跡(43)がみられる。特に今回調査対象となった福田・沼ヶ入遺跡(1・2)にとって、至近距離の上ノ台館跡(4)は密接な関係を有していた可能性が考えられる。

集落跡では、行合道B遺跡(9)から9世紀末～10世紀初頭の堅穴住居跡1軒が発見され、山間部の貴重な古代の事例となっている。しかし、中世の集落跡は未発見である。この他、行合堂B遺跡(9)、熊屋敷B遺跡(10)から中世以降の木炭窯跡が発見されている。

(菊 田)

第4節 調査方法

福田遺跡、沼ヶ入遺跡、上ノ台遺跡の発掘調査では、原則的に当財団で踏襲されてきた調査方法を用いている。そこで、以下に一括して述べる。

遺跡や遺構の位置は、世界測地系に基づく国土座標IX系の座標を用いた。また、遺構や遺物の大まかな地点を示すために、10m単位のグリッドを設定した。グリッドの呼称は、北から南に1・2・3…と算用数字、西から東にA・B・C…とアルファベットを用い、これを組み合わせてA1・B2・C3…とした。

序 章

表土と盛土の除去は重機を用い、それ以外の遺構外堆積土および遺構内堆積土の掘削は、基本的に人力で行っている。遺構の精査は、その特性や規模・遺存状態等に応じて土層観察用畔を残し、土層の堆積状況や遺物の出土状況に留意しながら進めた。具体的には、木炭窯跡と大型土坑の一部(方形堅穴式遺構)は4分割法、その他の遺構は2分割法を採用し、掘立柱建物跡の柱穴では柱痕跡と掘形の識別を行った。また、遺物包含層は、谷の長軸に直交する2本のトレンチを設定し、その土層断面と調査区南壁の土層断面の観察をもとに、遺物を層位的に取り上げた。

遺構の記録は、実測図作成と写真撮影を行った。実測図作成は、平面図と土層断面図の作成を原則とし、平面図については、測量基準点をもとに光波測距儀を使用して測量し、現場で結線した。断面図については、遺跡内に移動した簡易水準点をもとに作図した。各遺構の図化に際しては、1/20の縮尺を原則とし、遺構の規模・性格に合わせて1/40の縮尺も適宜使用した。また、遺跡底面の地形図は原則として1/200の縮尺で作成した。遺物は、遺構及びグリッド単位で取り上げを行い、出土層位を記録している。

写真是35mm判のモノクロームとカラーリバーサルフィルムカメラを使用するとともに、補助的にデジタルカメラを用い、同一被写体の撮影を行った。また、福田遺跡と沼ヶ入遺跡では、ラジコンヘリコプター搭載カメラによる空中写真撮影も行っている。

これらの調査記録および出土遺物については、報告書刊行後に当財團の定める基準に従って整理を行い、福島県教育委員会へ移管した後、福島県文化財センター白河館に収蔵される予定である。

(由 井)

参考文献

- 福島県教育委員会 2015 「一般国道115号相馬福島道路道路発掘調査報告3」
福島県教育委員会 2015 「福島県道路分布調査報告書22」
塙町 1992 「塙町史 第1巻通史」
福島県農地林務部農地計画課 1988 「土地分類基本調査 保原」



発掘調査(上ノ古窯跡)



空撮準備(下ノ古窯跡)

第1編 福田遺跡

遺跡記号 D T - F K D
所在地 伊達市巣山町下小国字福田・桜町
時代・種類 中世の居住城、城館関連
調査期間 平成27年6月29日～8月28日
調査員 菅原祥夫、菊田順幸、廣川紀子、
由井文菜

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況

福田遺跡は、福島県伊達市靈山町下小国字福田・桜町に所在する。地形的には、小国川南岸の開けた河岸段丘上にあたり、市の中心部からは南東に約5km離れ、太平洋沿岸の相馬市から中通り地方の福島市へ抜ける国道115号線(中村街道)のルート沿いにある。

周囲には、中世城館跡やその関連遺跡が分布しており、西側に隣接して沼ヶ入遺跡(本書第2編)、小国川対岸の真正面に上ノ台館跡が位置している。

調査開始前の現況は、西向きの起伏の少ない畠地・荒地であった。ただこれは、2回の農地基盤整備で斜面上部を削って作り出されたものである。場所によって1m近くの厚い盛土が認められ、遺構検出面の状況は現地表面とかなり違っていた。

(菅原)

第2節 調査経過

今回の調査範囲は、平成26年度の試掘調査の結果、要保存面積が確定した1,100m²が対象である。調査期間は、平成27年6月29日～8月28日である。

当初は、事前準備として調査員1名が現場に入った。6月29日に生い茂った調査区の除草と排土運搬路の鉄板敷設を行い、7月2日から表土剥ぎを開始した。表土剥ぎは放射線量の計測の結果、上位3cmを最初に除去し、その後、下位を剥ぐという2段階の工程を踏まなければならなかったうえ、盛土が厚く、調査区中央のU字溝と暗渠を避けて行わなければならなかつたが、7月上旬には遺構の分布状況が見えてきた。この結果を受け、7月13日には相馬西道路の相馬市東羽黒平遺跡の調査を終えた調査員が合流し、同日から人力による遺構検出作業を開始した。

ところが、まもなく梅雨が本格化し、梅雨明け後の7月末～8月上旬の2週間は、連日38～40℃の記録的猛暑となつた。そのため、作業の進捗は著しく滞つたが、盆前までには主要な土坑、溝跡、小穴の掘り込みと記録を終えることができた。

梅雨明け後は打って変わって涼しくなつたものの、小雨交じりの日が続いた。しかし、同時進行していた上ノ台館跡の試掘終了に伴い、作業員が増加したことで作業が軌道に乗り始めた。これにより、前年度の試掘報告(福島県教育委員会2015)で古代の堅穴住居跡と予想された遺構が、中世の方形堅穴状遺構に比定される遺構(4号土坑)であることが判明した。

こうした経過を経て、8月28日に実質的な調査が終了し、調査員及び作業員の全員は沼ヶ入遺跡の調査へ移動した。その後、9月28日に沼ヶ入遺跡と一括で空撮を行い、10月5日に工事側へ引き渡しを行つた。

(菅原)

第1編 福田遺跡

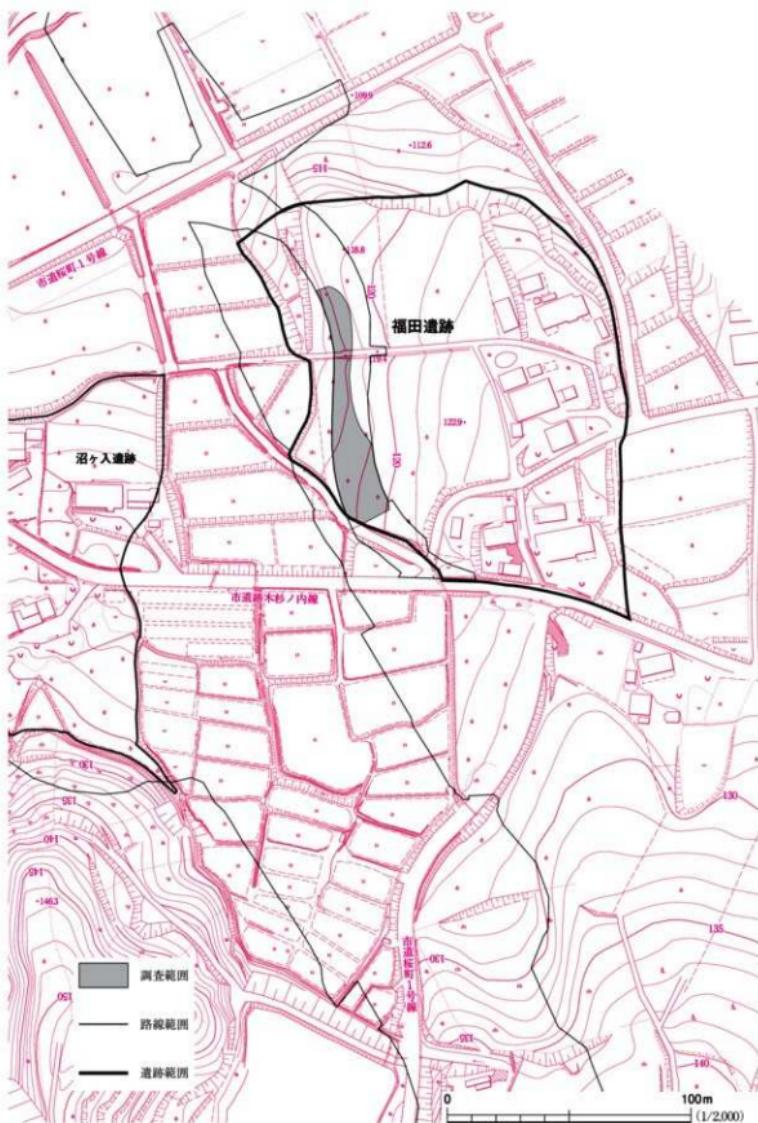


図1 調査区位置図

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

今回の調査区は、福田遺跡の西端付近にあたる。地形的には、南北に開析した谷に面する西向き斜面であり、中央に浅い沢が入り込み、遺構検出面の標高は116.6～118.8mを測る。検出された遺構は、土坑4基、溝跡2条、小穴26個を数え、北側に溝跡、南側に小穴が集中していた。

それらの時期の特定は、共伴遺物が無いため難しいが、4号土坑に関しては中世特有の方形竪穴状遺構の特徴を備えている。また、混入品ではあるが、2号溝跡の覆土から、15世紀のロクロかわらけが出土していることから、本遺跡の存続期間の一端は中世室町期に求めることができる。

基本土層

基本土層は、色調・土質の諸特徴からL I a～VIに分層している。以下、説明する(図2)。

L I a 黒褐色土(10YR2/3)である。耕作土の表土層で、層厚は10～15cmを測る。

L I b 褐色土(10YR4/6)である。農地基盤整備に伴う盛土で、主に調査区北部に分布する。層厚は50～70cmを測る。

L I c 灰黄褐色土(10YR4/2)である。農地基盤整備に伴う盛土で、主に調査区南部に分布する。層厚は45～60cmを測る。

L II 暗褐色粘土(10YR4/1)である。

L III 暗褐色土(10YR3/3)である。旧表土で、主に調査区南部に分布する遺構検出面である。層厚は5～15cmを測る。

L IV 褐色土(10YR4/6)である。L IIIとL IVの漸移層で、調査区南部のうち、L IIIの分布しない箇所の遺構検出面である。層厚は15～30cmを測る。

L V 黄褐色土(10YR5/6)である。しまりのややある基盤層で、層厚は30cm以上を測る。調査区北部ではL III・IVが分布しないため、本層が遺構検出面である。

L VI 明褐色粘土(7.5YR5/8)である。しまりのある粘質の基盤層で、層厚は25cm以上を測る。

(菊田)

第2節 土 坑

今回の調査で発見された土坑は4基である。それらは平面分布のまとまりから、北側の1・2号

第1編 福田遺跡

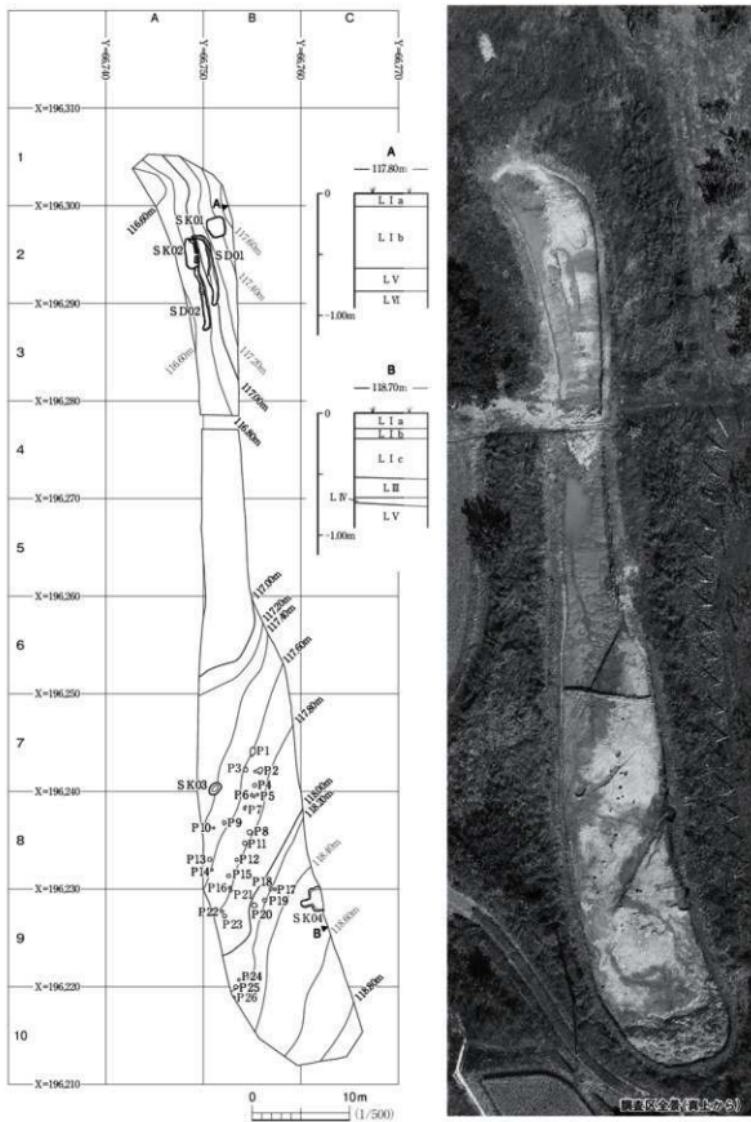


図2 遺構配置図、基本土層

土坑と、南側の3・4号土坑の2つのグループに分けられる。前者は時期・性格が不明であるが方形基調で、類似した堆積土が認められることから、同時存在した可能性が高い。後者は中世のものとみられ、3号土坑が焼成土坑、4号土坑が方形堅穴状遺構に相当する。

1号土坑 SK 01 (図3、写真3)

本土坑は調査区北部のB2グリッドに位置し、LV上面で検出された。南西約70cmには1号溝跡が隣接している。他の遺構との重複はない。

平面形は不整な方形で、規模は、長軸2.01m、短軸1.86m、深さは検出面から最大21cmを測る。東壁は急な角度で立ち上がるが、西壁の壁高は3cm程度で、底面は平坦である。

堆積土は3層に分かれ。いずれも多量の地山塊を含む特徴が認められ、人為堆積土と考えられる。 ℓ 1は地山塊を多量に含んだにぶい黄褐色土、 ℓ 2は地山塊を多量に含んだ灰黄褐色土、 ℓ 3はにぶい黄褐色土塊を多量に含んだ褐色土である。遺物は出土していない。

本土坑の時期・性格は不明である。

(由 井)

2号土坑 SK 02 (図3、写真3)

本土坑は調査区北部のA2グリッドに位置し、LV上面で検出された。2号溝跡と重複し、本土坑の方が新しい。ただし、断面図を作成したA-A'はちょうど2号溝跡が途切れた箇所にぶつかり、この新古関係が表現されていない。

平面形はやや不整な隅丸長方形で、規模は、長軸3.12m、短軸1.31m、検出面からの深さは、12cmを測る。東壁は急な角度で立ち上り、西壁は緩やかに立ち上がる。底面は西側に傾斜している。

堆積土は2層に分かれ、どちらも人為堆積土と考えられる。 ℓ 1は炭化物粒を少量、焼土粒を極少量含んだにぶい黄褐色土、 ℓ 2はにぶい黄褐色土塊を多量含んだ褐色土であり、 ℓ 2は1号土坑の ℓ 3と類似している。遺物は出土していない。

本土坑の時期・性格は不明である。

(由 井)

3号土坑 SK 03 (図3、写真3)

本土坑はB7・8グリッドに位置し、LIII・IV上面で検出した。重複遺構はない。平面形は梢円形基調を呈し、壁面から底面はなだらかに推移する。規模は長軸1.22m、短軸96cm、検出面からの深さ96cmを測る。

堆積土は4層に分層され、このうち底面を覆う ℓ 3・4は多量の炭化物を含み、その上の ℓ 2は焼土化した壁の崩落土である。遺物は出土しなかった。

本土坑の性格ははらかの焼成施設と考えられる。時期は、形態が古代に一般的に見られる木炭焼成土坑のように角張っていないことから、周辺状況を勘案して中世のものとみておく。(菅 原)

第1編 福田遺跡



図3 1～4号土坑

4号土坑 SK 04(図3、写真3)

本土坑はC 8・9グリッドに位置し、L III・IV上面で検出した。重複遺構はない。平面形は隅丸方形で堅穴状をなし、西壁に舌状の張出部が付く。東側は調査区外に続いている。

規模は長軸2.30m、短軸1.26m以上、検出面からの深さ40cmを測り、底面はほぼ平坦に整えられている。しかし、貼床および明確な踏み締りは確認できなかった。また西壁の張出部は、長さ1.06m、幅70cmで、底面は先端に向かってスロープ状に立ち上がる。

遺構内全体は、地山塊を多量に含む單一層(ℓ 1)で人為的に埋め戻されている。

遺物は出土していない。

本土坑は出土遺物を欠くが、各地の類例からみて、西壁に入口を持つ中世の方形堅穴状遺構に比定できると思われる。(菅原)

第3節 溝跡

今回の調査で発見された溝跡は2条である。等高線に沿って南北に並走しており、堆積土は類似している。したがって、同時存在したと考えられる。

1号溝跡 SD 01(図4、写真4・5)

本遺構は、調査区北部のA 2・B 2・B 3グリッドに位置し、L V・VI上面で検出された。西方約50cmには2号溝跡が隣接している。他の遺構との重複はない。

本遺構は2号溝跡と並行するようにほぼ南北に約7m伸び、さらに北端で屈曲して約1.10m伸びている。最大幅は1.04mで、深さは検出面から最大20cmを測る。壁は急な角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

堆積土は、人為堆積土とみられる灰黄褐色土1層である。小礫を極少量、炭化物を少量、地山塊を多量に含んでいる。遺物は出土していない。

本遺構は出土遺物に恵まれなかつたものの、堆積土が中世の3・4号土坑および小穴群と違い、縮まりがほとんどなく、ぼそぼそであることから、近世以降の所産と推定される。性格は不明である。(由井)

2号溝跡 SD 02(図4、写真4・5)

本遺構は、調査区北部のA 2・3グリッド、B 2・3グリッドに位置し、L V・VI上面で検出された。東方約50cmには1号溝跡が隣接している。2号土坑と重複しており、本遺構の方が古い。しかし、2号土坑より本遺構の方が重複範囲の底面が深いため、ほぼ全体を検出することができた。

本遺構は1号溝跡と並行するように南北に伸び、南端が南西方向に若干曲がっている。また、

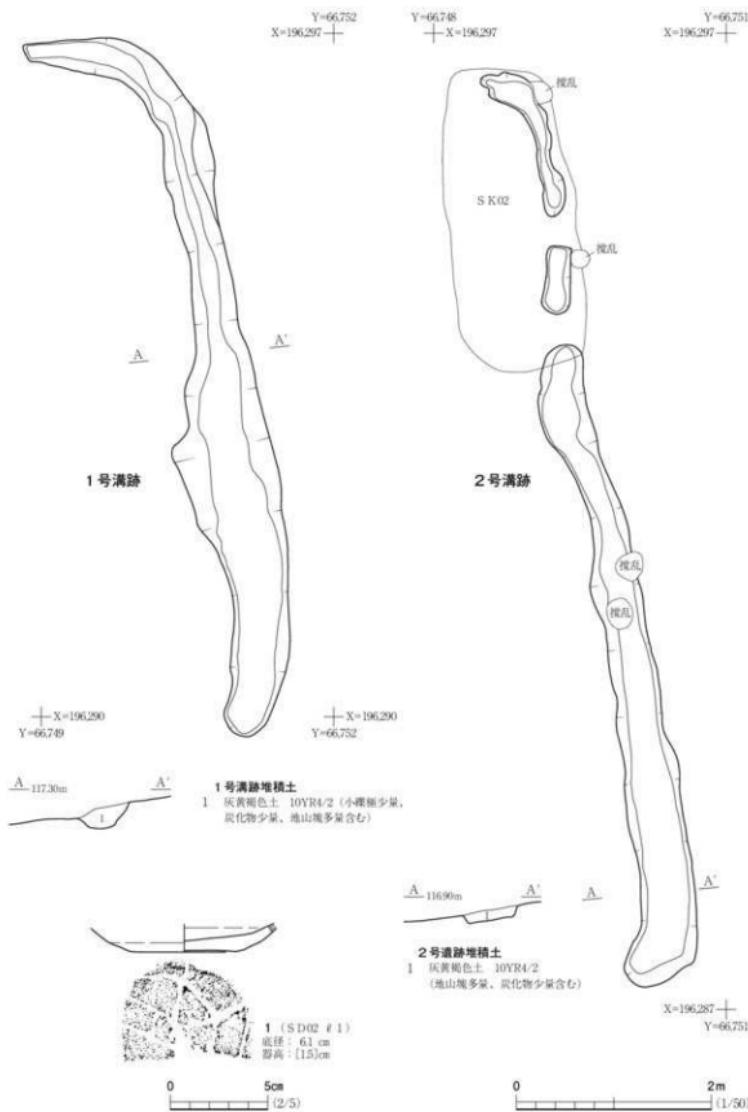


図4 1・2号溝跡、2号溝跡出土遺物

北端は西に向かって屈曲している。規模は、南北に伸びる部分で8.50m、北端で屈曲した先は60cm、南端で屈曲した先は70cm、最大幅58cmで、深さは検出面から最大11cmを測る。壁は急な角度で立ち上がり、底面は一部平坦な部分もあるが、擾乱の影響か全体的に凸凹であり、北側では2号土坑に壊されて遺存していない部分がある。

堆積土は人為堆積土とみられる灰黄褐色土1層である。1号溝跡ℓ1にきわめて類似し、炭化物を少量、地山塊を多量に含む。

遺物は、堆積土中より15世紀に比定されるロクロかわらけ(図4-1)が出土した。底部外面には回転糸切痕が認められ、胎土は緻密で、黄橙色を呈する。しかし、本遺構は1号溝跡と並走し、堆積土がきわめて類似することから、1号溝跡と同時存在した近世以降の所産の可能性が高く、ロクロかわらけは調査区外に存在する中世遺構からの混入品と考えられる。性格は不明である。
(由井)

第4節 小穴群

確認できた小穴は26個である(図5)。調査区南部のB7~10グリッドで、LⅢ~Ⅳ上面から検出された。

それらの位置は、ちょうど中世の3号土坑と4号土坑の中間域に収まり、平面分布に「小穴群」としてのまとまりが認められる。また、等高線に沿っているのが特徴で、建物跡としては組まなかつたが、直線状に並ぶものもある。

したがって、3・4号土坑と関連した中世の柵列などの性格が考えられる。

基本的な属性は、以下のとおりである。

平面形：円形基調

断面形：円筒状

大きさ：径15~36cm(平均24cm)

深さ：検出面から3~48cm(平均18cm)

堆積土：黒褐色土 10YR2/3

出土遺物：無し

(菅原)

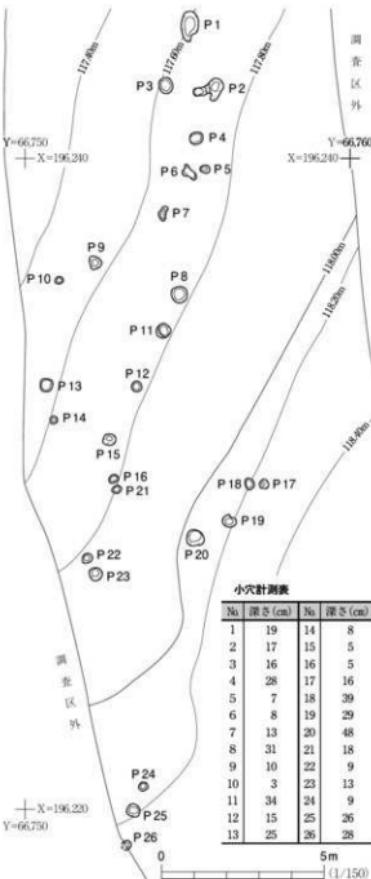


図5 小穴群

第3章 総括

福田遺跡の調査は、前年度の試掘報告(福島県教育委員会2015)に基づき、堅穴住居跡で構成される古代の集落跡を予想して実施した。しかし、実際には中世室町期における武士階級の居住の場であったことが判明したと言える。

具体的根拠は、次の2点に求められる。

- ◎4号土坑：中世の城館・物流拠点に特徴的な方形堅穴状遺構(鈴木2006・2015他)に比定される。
舌状の張出部(入口)の付く県内事例は、会津坂下町古館遺跡(会津坂下町教育委員会1992)などにみられ、定型的なものである。
- ◎かわらけ：2号溝跡出土のかわらけは、福島県のかわらけ編年(福島県考古学会中世部会1997)に従うと、15世紀中心の年代観が与えられ、使用場面は武士階級の宴会儀礼に特定できる。

ただし、中世遺構の分布密度が薄く、遺物量は少ないため、ごく短期間で廃絶したと考えられる。この所見は、対岸の沼ヶ入遺跡と一致しており、注目される。また、今回の調査区は遺跡範囲の西端付近であることから、関連遺構は東方の調査区外に広く展開していると推測される。今後の開発行為に対しては、十分な文化財保護側のチェックが必要である。

(菅原)

引用・参考文献

- 会津坂下町教育委員会 1992 「古跡遺跡」「阿賀川Ⅱ期地区遺跡発掘調査報告書」
鈴木弘太 2006 「中世「堅穴建物」の検討－都市鎌倉を中心として－」『日本考古学』第21号 日本考古学協会
鈴木弘太 2015 「中世鎌倉の都市構造と堅穴建物」同成社
東北中世考古学会 2001 「掘立と堅穴」高志書院
福島県考古学会中世部会 1997 「かわらけ編年」の再検討－11世紀～19世紀(その2)』『福島考古』38号
福島県教育委員会 2015 「福島県内遺跡分布調査報告22」



第2編 沼ヶ入遺跡（1次調査）

遺跡記号 D T - N G I
所在地 伊達市靈山町下小国字沼ヶ入・御渡
時代・種類 縄文時代の狩猟場、中世の居住域、
近世の墓域
調査期間 平成27年7月27日～9月30日
調査員 菅原祥夫・廣川紀子・由井文菜

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況

沼ヶ入遺跡は、福島県伊達市靈山町下小国字沼ヶ入・御渡に所在する。地形的には、小国川南岸の開けた河岸段丘上にあたり、伊達市中心部からは南東に約5km離れ、浜通り地方の相馬市から中通り地方の福島市へ抜ける国道115号線(中村街道)のルート沿いである。

周囲には、中世城館跡やその関連遺跡が分布しており、東側に隣接して福田遺跡(本書第1編)、小国川対岸の真正面に上ノ台館跡が位置している。

調査開始前の現況は、背後の丘陵と明確な段差で区切られた東向き緩斜面の畠地・荒地であった。当初、これは農地基盤整備によるものと考えていたが、調査の結果、中世の造成地形を反映していることが明らかとなった。

(菅原)

第2節 調査経過

今回の調査範囲は、平成26年度の試掘調査の結果、要保存面積が確定した1,300m²が対象である。調査期間は平成27年7月27日～9月30日である。調査期間前半の8月一杯は福田遺跡と同時に調査を進め、後半の9月から本遺跡単独で調査を実施し、空撮および現地引き渡しは福田遺跡と一緒に行った。

調査期間前半は、まず初めに調査区の除草と排土運搬路の鉄板敷設を行い、7月27日から表土剥ぎを開始した。表土剥ぎは放射線量の計測の結果、上位3cmを最初に除去し、その後、下位を剥ぐという2段階の工程を踏まなければならなかった。さらに、周辺民家への砂ぼこりの飛散に注意しなければならなかつたが、8月5日には終了し、数基の土坑のほか、掘立柱建物跡2棟を検出した。

これにより、調査の見通しが立ったことから、盆前までは福田遺跡の調査を優先することとし、検出した遺構をいったんブルーシートで養生した。

盆明け後は、福田遺跡の調査員および作業員を徐々に本遺跡に移行させながら遺構検出と精査を進め、9月に入ってからは全人員を集結させた。その結果、本遺跡は掘立柱建物跡、方形堅穴状遺構に相当する土坑、焼成土坑で構成された中世主体の遺跡であり、1号掘立柱建物跡では鬼門の方角(北東)で地鎮が行われたことが判明した。本遺跡は中村街道に面した立地で、周囲には中世城館跡やその関連遺跡の分布が顕著であることから、貴重な事例の追加になったと思われる。

こうした経過を経て、9月28日に空撮を行って実質的作業を終了し、10月5日には工事側に対して現地引き渡しを行った。

(菅原)

第2編 沼ヶ入遺跡（1次調査）

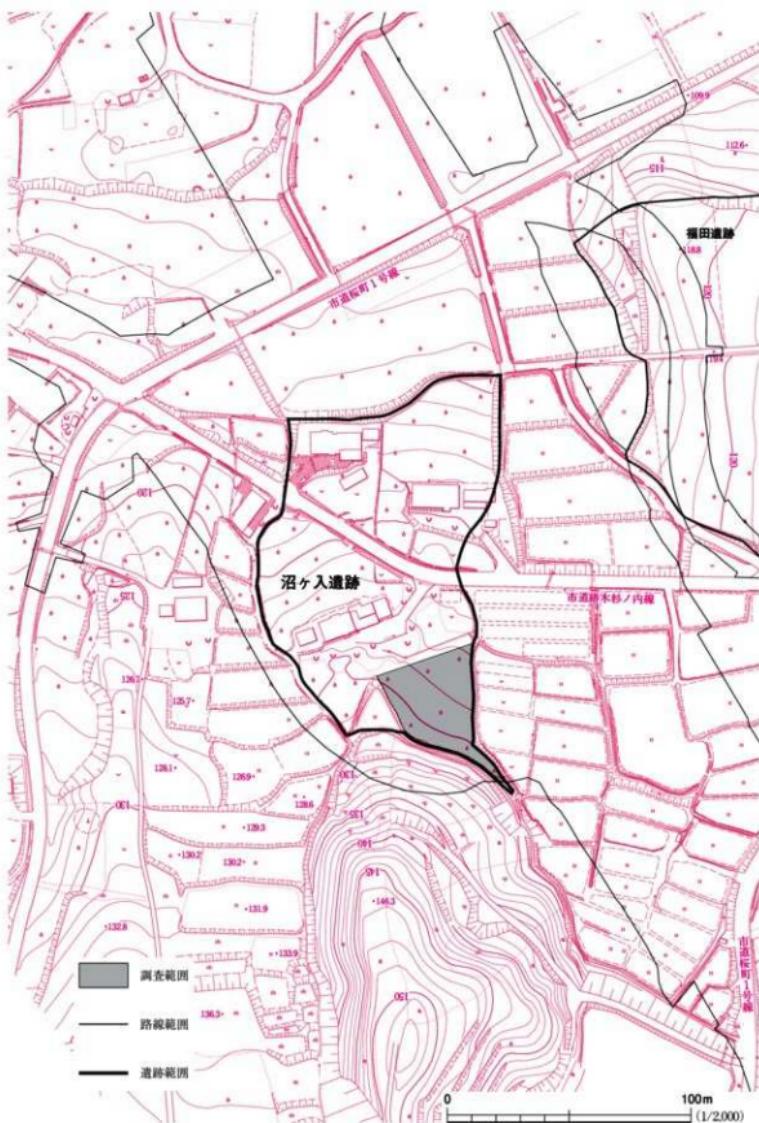


図1 調査区位置図

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

今回の調査区は、沼ヶ入遺跡の範囲の南端付近にあたる。中村街道に面し、北へ伸びる舌状丘陵の東斜面で、切土により緩傾斜に造成されている。当初は、これが農地基盤整備に伴うものと考えていたが、調査の結果、中世までさかのほる可能性が高まった。北東部には浅い沢が入り込み、調査区北東隅と南東隅の比高差は遺構検出面で3.2mである。

検出された遺構は、掘立柱建物跡2棟、土坑9基を数える。それらは営まれた時代と性格によって、次の3つに区分される。

縄文時代…5・8・9号土坑(落し穴・性格不明)

中世…1・2号掘立柱建物跡、1・2号土坑(方形堅穴状遺構に相当する土坑・焼成土坑)

近世…3・6号土坑(墓坑)

したがって、本遺跡は「縄文時代：狩猟場」→「中世：居住の場」→「近世：墓域」の変遷をたどり、中世に関しては、隣接の福田遺跡と同時存在したと推測される。
(菅原)

基本土層

基本土層は、色調・土質の諸特徴からL I～Vに分層している。以下、各層について説明する。

L I 黄褐色土(10YR5/6)である。農地基盤整備に伴う盛土である。調査区全体に分布しており、支谷を埋めた北東部では厚さ1m近くに達するところもある。

L II 褐色土(7.5YR4/6)である。調査区の所々に分布する。層厚は15～35cmを測る。

L III 褐色土(10YR4/4)である。旧表土である。調査区北東部の浅い沢に分布し、層厚は、5～15cmを測る。遺構検出面である。

L IV にぶい黄褐色土(10YR4/3)である。L IIIとL Vの漸移層で、調査区北東部の浅い沢とその周間に分布し、L IIIの分布しない箇所の遺構検出面である。層厚は、15～30cmを測る。

L V 黄褐色土(10YR5/6)である。しまりのややある基盤層で、調査区内で最も標高が高く、L III・IVの分布しない調査区南東部の遺構検出面である。層厚は30cm以上を測る。

(菊田)

第2編 沼ヶ入遺跡(1次調査)

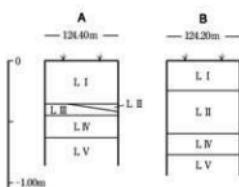
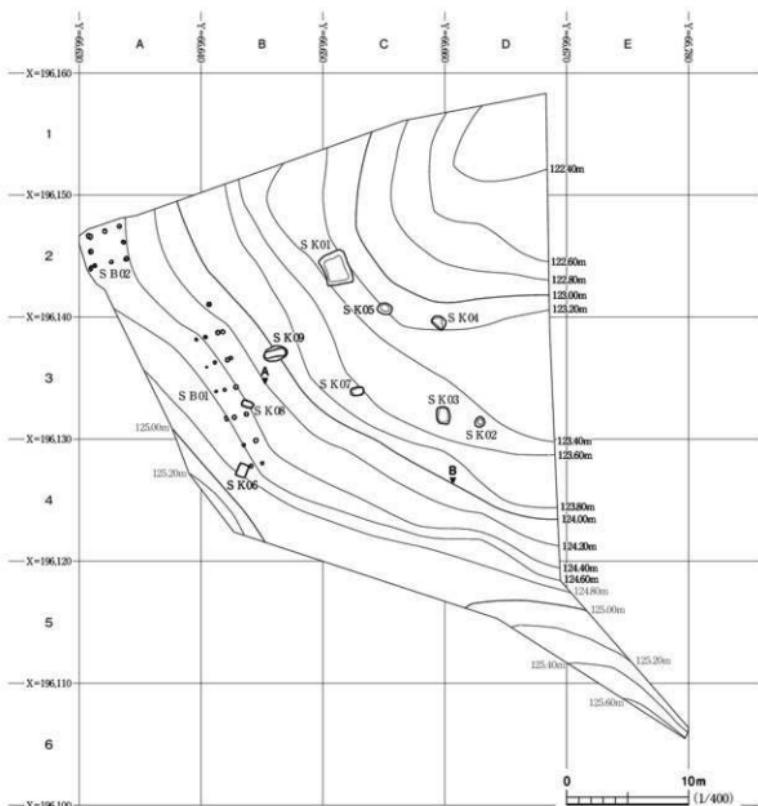


図2 遺構配置図、基本土層

第2節 掘立柱建物跡

今回の調査で発見された掘立柱建物跡は、中世に營まれた2棟である。どちらも背後の丘陵と緩斜面を区切る切土壁に沿っていた。

1号掘立柱建物跡 S B 01

遺構(図3、写真5~7)

本建物跡はA3グリッド、B2~4グリッドのLV上面から検出された。北へ舌状に伸びる丘陵裾部の切土壁近くに位置し、方向はそれに平行するN19°Wを指す。1間×5間の長大な南北棟であり、1m前後のきわめて狭い梁行長は、中世城館跡とその関連遺跡に認められる「狭梁掘立柱建物跡」(高橋1996・2002)の特徴と一致する。さらに付帯施設として、切土壁側の西側に廂(P1~4)が付き、東側の桁行柱列には、張出し(P19)および控柱(P17・18)がみられる。控柱からは中國渡来錢が出土した。

周辺遺構との関係は、南東隅の柱穴(P5)の西10cmに6号土坑、東桁行の柱筋上に8号土坑が位置している。また、北西約8.5mに2号掘立柱建物跡が位置している。

芯々間による柱間寸法は、次の通りであった。

【桁行】

東側柱列(P11~16) … 197m + 233m + 2.34m + 2.32m + 2.43m = 11.39m

西側柱列(P5~10) … 1.82m + 2.40m + 2.40m + 2.37m + 2.26m = 11.25m

【梁行】

南側柱列(P5~11) … 0.98m

北側柱列(P10~16) … 1.12m

【張出し】

(P16~19) … 2.42m

【廂】

(P1~4) … 2.48m + 2.15m + 2.40m = 7.03m

柱穴の平面形は円形基調を呈し、背後の切土壁側が小さく、前面の平場側が大きい。遺存状態は良好で、開口部の計測値は径20~25cm、検出面からの深さは18~30cm、柱痕跡の径は12~16cmを測る。また、一部の柱穴では、柱痕跡に焼土・炭化物が含まれ、周囲の検出面も焼土化した状況が観察された。したがって、本建物跡は、a)当時の掘り込み面がほぼ保たれており、b)火災にあって廃絶したと考えられる。さらに、a)からは、平場が中世に造成されたこと、b)からは、本建物跡が後述の1号土坑(方形竪穴状遺構)と並行関係にあった可能性がうかがえる。

控柱(P17・18)は、北東の身舎柱穴(P15・16)に接して検出された。この方角は、陰陽道の鬼

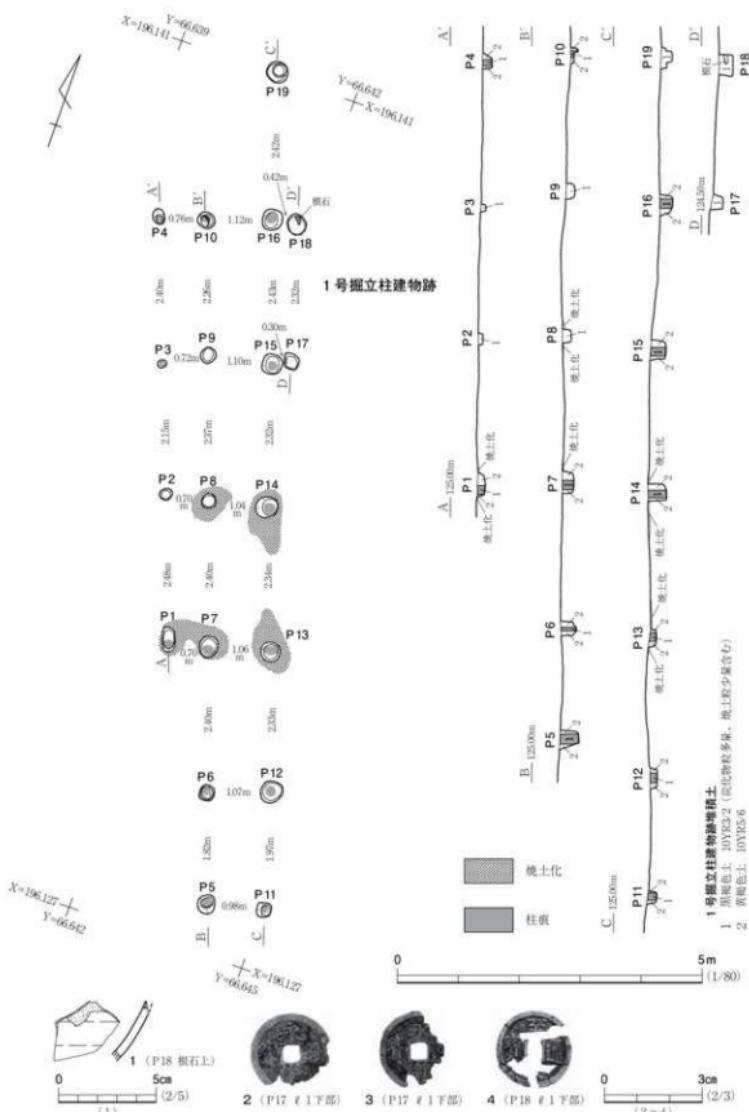


図3 1号掘立柱建物跡、出土遺物

門=「艮」(うしとら)と一致しており、P 17では、西壁際の掘形下部から裏返しの中国渡来銭2点(図3-2・3)、P 18では、根石の下から裏返しの中国渡来銭1点、根石の上から中国産青磁片1点が出土した(図3-4)。それらは、建物造営時に柱を埋める過程で埋納された地鎮の「鎮物(しづめもの)」と考えられる。

遺 物(図3、写真17)

遺物には、控柱から出土した中国渡来銭3点、中国産青磁1点があり、建物造営年代を示す定点資料となる。このうち中国渡来銭は腐食が著しいため、写真提示した。

図3-1は、P 18から出土した龍泉窯産青磁碗である。小破片のため、詳細な年代特定は困難であるものの、概ね15世紀に比定される。同図2~4の中国渡来銭は、2・3がP 17から出土した1411年初鋤の「永楽通寶」(明銭)、4が、P 18から出土した1310年初鋤の「至大通寶」(元銭)である。このうち初鋤年代の新しい方の「永楽通寶」は、15世紀の日本へ大量輸入されたことが知られ、龍泉窯産青磁碗の年代観と整合すると言える。

ま と め

本建物跡は、中世城館跡に認められる「狭梁掘立柱建物跡」と同一特徴を備えている。建物造営時に地鎮が行われ、火災により廃絶したと考えられる。營まれたのは、「鎮物」の年代観から、15世紀に求められる。

(菅原)

2号掘立柱建物跡

遺 構(図4、写真8・9)

本建物跡は、A 2グリッドのLV上面で検出された。1号掘立柱建物跡と同じく、北へ舌状に伸びる丘陵裾部の切土壁近くに位置し、南北方向はこの切土壁にはば平行したN 13°Wを指す。

今回確認したのは、2間×2間のほぼ正方形の範囲で、北・西側は調査区外に広がる可能性がある。また、南西隅のP 3に隣接してP 9が検出されたが、これは、柱痕跡の無い浅いくぼみだった。重複遺構は無く、南東約8.5mに1号掘立柱建物跡が位置している。

芯々間による柱間寸法は、次の通りであった。

$$\text{東側柱列(P 6-8)} \cdots 1.34\text{ m} + 1.32\text{ m} = 2.66\text{ m}$$

$$\text{西側柱列(P 1-3)} \cdots 1.28\text{ m} + 1.22\text{ m} = 2.50\text{ m}$$

$$\text{南側柱列(P 3-8)} \cdots 1.40\text{ m} + 1.28\text{ m} = 2.68\text{ m}$$

$$\text{北側柱列(P 1-6)} \cdots 1.38\text{ m} + 1.27\text{ m} = 2.65\text{ m}$$

柱穴は遺存状態が良好である。平面形は円形基調で、径26~32cm、深さ28~60cm、柱痕跡径16~20cmを測る。遺物は出土していない。

ま と め

本建物跡は、2間×2間以上の規模で、範囲は調査区外に広がる可能性がある。出土遺物を欠くが、1号掘立柱建物跡と同時期のものと推定しておく。

(菅原)

第2編 沼ヶ入遺跡(1次調査)

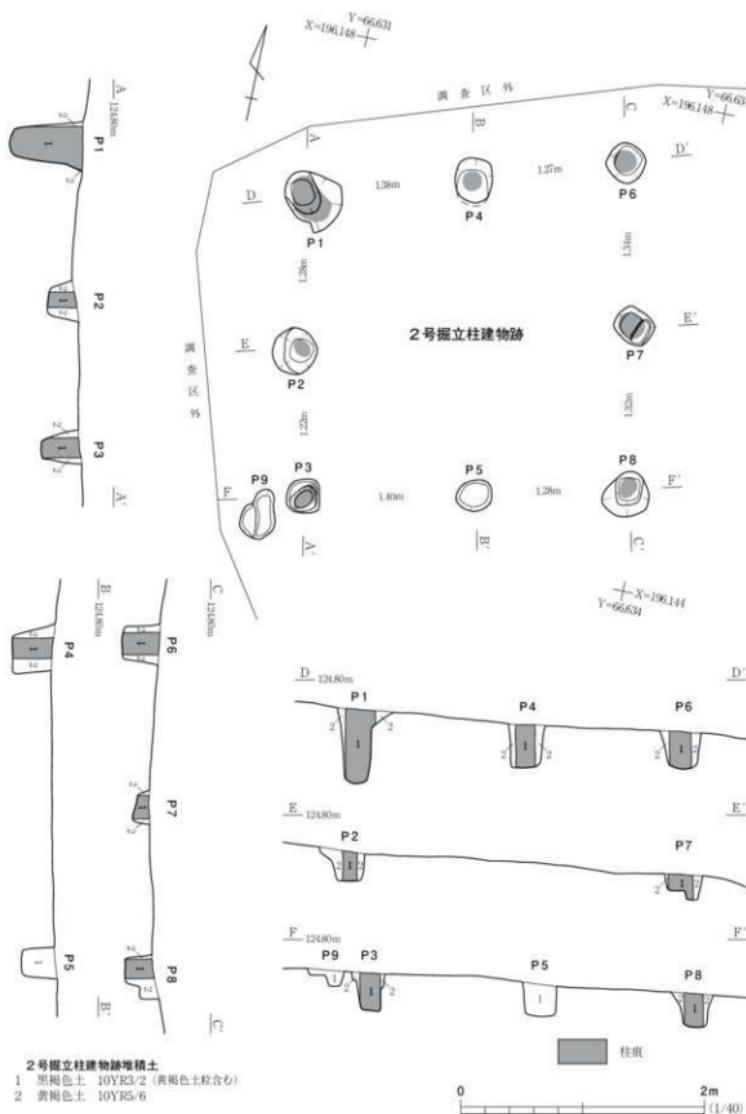


図4 2号掘立柱建物跡

第3節 土 坑

今回の調査で発見された土坑は9基である。出土遺物や周辺遺構との関係から、縄文時代、中世、近世のものに区分される。以下、登録番号順に述べる。

1号土坑 SK 01 (図5、写真10~13)

本土坑は、B・C 2グリッドのL III・IV上面で検出された竪穴状の土坑である。平面形は台形を呈し、西壁が内側にやや弓なりで短く、北西隅と南西隅が突出している。規模は長軸2.71m、短軸2.08m、検出面からの深さは42cmである。長軸方向は等高線と並行していた。重複遺構はなく、東西中軸線を西へ約9.5m延長すると、1号掘立柱建物跡の張出し柱穴P 19にぶつかる。

底面はほぼ平坦に整えられているものの、貼床ではなく、明確な踏み締りは認められなかった。壁は、開き気味に立ち上がる。

堆積土は2層に分層された。どちらも人為堆積土と考えられる。黄褐色土塊と炭化物を含み、主に下層のℓ 2から多数の焼石が投棄された状態で出土した。この所見は、中世の1号掘立柱建物跡の火災痕跡と対応するもので、両者が同時存在した可能性を示唆している。

遺物は出土しなかった。

本土坑は、方形竪穴状遺構に相当し、時期は中世と考えられる。

(菅原)

2号土坑 SK 02 (図5、写真14)

本土坑は、D 3グリッドのL IV上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、規模は長径82cm、短径80cm、検出面からの深さは20cmである。重複遺構はなく、西約2mに3号土坑がある。底面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がり、上部が焼土化していた。

堆積土は3層に分層され、いずれも焼土・炭化物を含む黒褐色土である。遺物は出土しなかった。

本土坑は何らかの焼成施設である。時期については明確でないが、形態が古代の木炭焼成土坑のように角張った長方形を呈さないことから、中世のものとみておく。

(菅原)

3号土坑 SK 03 (図5、写真14・17)

本土坑は、調査区南部のC・D 3グリッドに位置し、L IV上面で検出された。東側約2mには2号土坑、北側約6mには4号土坑、北西約6mには7号土坑が所在する。他の遺構との重複はない。

平面形はやや不整な隅丸長方形で、規模は、長軸1.40m、短軸1.09m、深さは検出面から最大36cmを測る。壁は急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。

堆積土は3層に分かれ、いずれも人為堆積したものと考えられる。ℓ 1・2は炭化物粒をわずか

第2編 沼ヶ入跡地（1次調査）



図5 1～4号土坑、出土遺物

に含み、明褐色粘質土塊を斑状に含んだ褐色土、 ℓ 3は炭化物粒をわずかに含んだにぶい褐色粘質土である。遺物は最下層の ℓ 3から、判読不明の古銭6点が結合した状態で出土した(図5-1)。ただし、調査の不手際から、明確な出土位置は不明である。

本土坑は平面形が隅丸方形で、人為的に埋め戻されており、錢貨が埋納されていることから、6号土坑と同じ近世の墓坑であると考える。
(由 井)

4号土坑 SK 04 (図5、写真14)

本土坑はC 2・3グリッドのL III・IV上面で検出された。平面形は不整長方形を呈し、規模は長軸1.20m、短軸92cm、検出面からの深さは24cmを測る。重複遺構はなく、西約3mに5号土坑がある。底面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。

堆積土は3層に分層された。いずれも人為堆積土と考えられる。遺物は出土しなかった。

本土坑の時期と性格は不明である。
(菅 原)

5号土坑 SK 05 (図6、写真14)

本土坑は、C 2グリッドのL III上面で検出された。平面形は梢円形を呈し、規模は長径1.16m、短径92cm、検出面からの深さは70cmである。重複遺構はなく、東約3mに4号土坑、北西約3mに1号土坑がある。底面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がり、中位から開き気味に変化する。

堆積土は2層に分層され、いずれも自然堆積したものと考えられる。 ℓ 1は旧表土起源で、やや色調が異なるが、8・9号土坑の ℓ 1と共通のものとみられる。 ℓ 2は壁の崩落土である。

遺物は出土しなかった。

本土坑は縄文時代の落し穴と考えられる。
(菅 原)

6号土坑 SK 06 (図6、写真15・17)

本土坑は、調査区南西部のB 4グリッドに位置し、L V上面で検出された。東10cmには1号掘立柱建物跡P 5が隣接し、北約4.5mには8号土坑が所在している。他の遺構との重複はない。

平面形は長方形で、規模は長軸1.08m、短軸82cm、検出面からの深さは最も深いところで18cmを測る。壁は急な角度で立ち上り、底面は平坦である。

堆積土は3層に分かれ、いずれも人為堆積したものと考えられる。 ℓ 1は炭化物粒・黄褐色砂質土塊をわずかに含んだにぶい黄褐色土、 ℓ 2は炭化物粒・黄褐色土塊をわずかに含んだ灰黄褐色土、 ℓ 3はにぶい黄褐色粘質土である。遺物は床面直上から「寛永通寶」が1点出土した(図6-1)。

本土坑は、平面形が長方形で、人為的に埋め戻されており、「寛永通寶」が埋納されていることから、近世の墓坑であると考える。
(由 井)

第2編 沼ヶ入遺跡(1次調査)



図6 5～9号土坑、出土遺物

7号土坑 SK 07 (図6、写真15)

本土坑は、調査区中央部のC 3 グリッドに位置し、L IV上面で検出された。南東約6mに3号土坑、北西約6mに9号土坑、西約8mに8号土坑が所在している。他の遺構との重複はない。

平面形は不整な楕円形で、規模は長径1.09m、短径69cmで、検出面からの深さは、最も深いところで14cmを測る。西壁は緩やかに、東壁は急な角度で立ち上がる。

堆積土は、炭化物・焼土粒をわずかに含んだにぶい黄褐色土の1層である。遺物の出土はない。

本土坑の時期・性格は不明である。

(由 井)

8号土坑 SK 08 (図6、写真15)

本土坑は、調査区西部のB 3 グリッドに位置し、L V上面で検出された。北東約3.5mには9号土坑、東約8mには7号土坑が所在する。他の遺構との重複はない。

平面形はやや不整な隅丸長方形で、規模は、長軸99cm、短軸55cm、検出面からの深さは、最も深いところで30cmを測る。壁は、急な角度で立ち上がる。

堆積土は3層に分かれ、いずれも自然堆積したものと考えられる。 ℓ 1は焼土・炭化物粒を少量含んだ旧表土起源の黒褐色土、 ℓ 2は焼土・炭化物粒を少量含んだにぶい黄褐色土、 ℓ 3は炭化物粒をわずかに含んだ褐色粘質土である。遺物は出土していない。

本土坑は、 ℓ 1が5・9号土坑の ℓ 1と共に旧表土起源の堆積土であることから、縄文時代に営まれた土坑と考える。性格は不明である。

(由 井)

9号土坑 SK 09 (図6、写真15)

本土坑は、B 3 グリッドのL IV上面で検出された。平面形は長楕円形を呈し、規模は長径1.98m、短径1.22m、検出面からの深さは96cmである。重複遺構はなく、南西約4mに8号土坑がある。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がり、北・南壁では中位から大きく開く形態に変化している。

堆積土は2層に分層され、いずれも自然堆積土と考えられる。 ℓ 1は、5・8号土坑と共に旧表土起源の流入土、P 2~4は、壁の崩落土および周辺土砂の流入土である。

遺物は出土しなかった。

本土坑は縄文時代の落し穴と考えられる。

(菅 原)

第3章 総括

今回の調査では、[縄文時代：狩猟場]→[中世：居住の場]→[近世：墓域]の変遷が確認された。特に、中世の成果は特筆されるもので、福田遺跡、上ノ台館跡と一体的な関連が想定できる（図7）。そこで以下、この点に焦点を絞り、調査成果の総括を行う。

第1節 沼ヶ入遺跡の1次調査でわかったこと

- ① 沼ヶ入遺跡が所在する伊達市靈山町下小国地区は、浜通り地方と中通り地方をつなぐ中村街道（現国道115号線）に面し、隣接の掛田地区は、中村街道と南北方向の道路（現国道349号線）が交差した交通の要衝に位置する。この地理的特性を反映して、中世室町期の周辺一帯は懸田氏歴代の居城とされる懸田城跡を筆頭に城館跡の存在が顕著であり、経石を埋納した塚群もある（図8）。本遺跡は、こうした遺跡群の1つと評価される。
- ② 北へ伸びる舌状丘陵の東斜面を造成した平場（図9）で、掘立柱建物跡2棟（S B 01・02）、方形堅穴状遺構に比定される土坑1基（S K 01）、焼成土坑1基（S K 02）が検出された。それら



図7 遺跡の位置関係

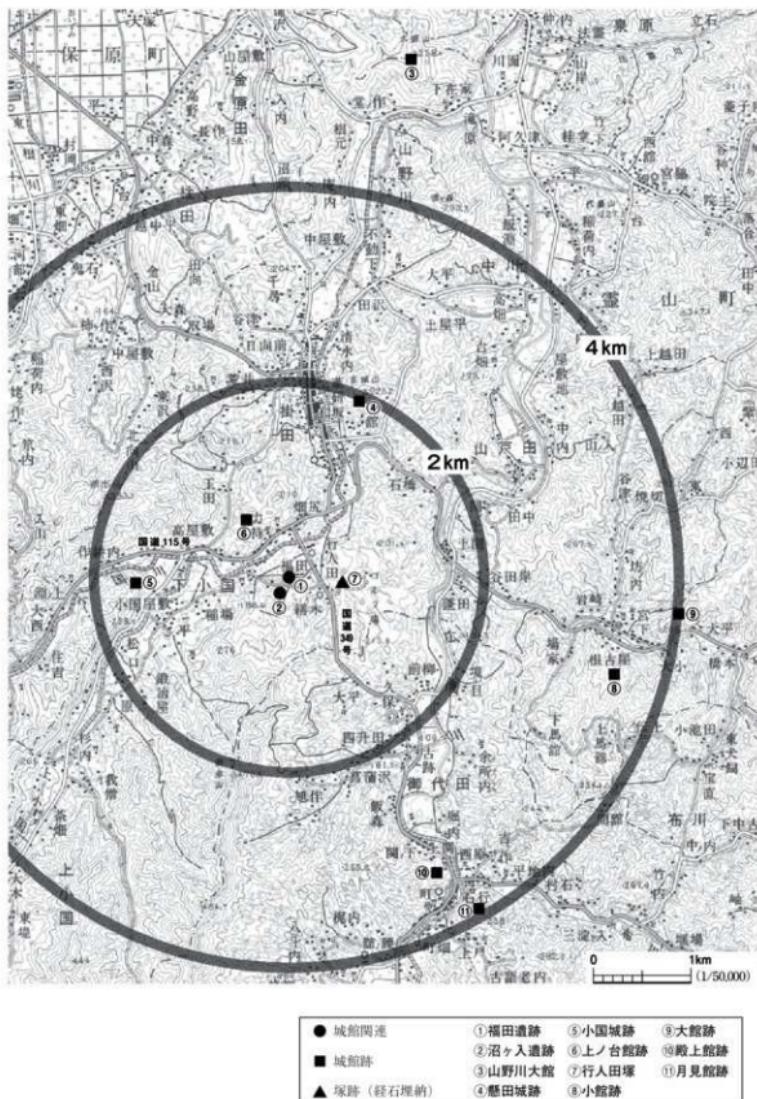


図8 関連遺跡の分布

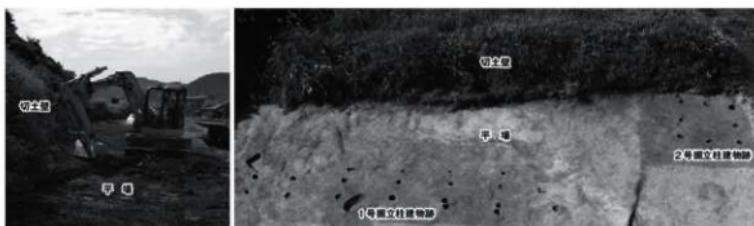


図9 平場と建物配置

の分布密度はまばらであり、重複関係は認められない。これに出土遺物の年代観を勘案すると、存続時期は15世紀のごく短期間と考えられ、廃絶要因は1号掘立柱建物跡と1号土坑の所見から火災に求められる。

- ③ 全体像が判明した1号掘立柱建物跡は、中世城館跡とその関連遺跡に特有の狭梁掘立柱建物跡（図10）の特徴を備えている。当該類型はきわめて狭い梁行構造（1間で、1.7尺～4.6尺）に加え、次の傾向が指摘されている（川俣町教育委員会1996）。

A：建設地は、丘陵傾斜地に造成した平場がほとんどである。

B：建設位置は、切土壁際に近く建ち、切土壁に平行する例が圧倒的に多い。

C：柱穴は、切土壁側は小さく、前面の平場側が大きい。

D：桁行の柱間寸法は、14世紀後葉頃：6.2尺→その後：8尺多用→16世紀中頃：6～7尺の変遷をたどる。

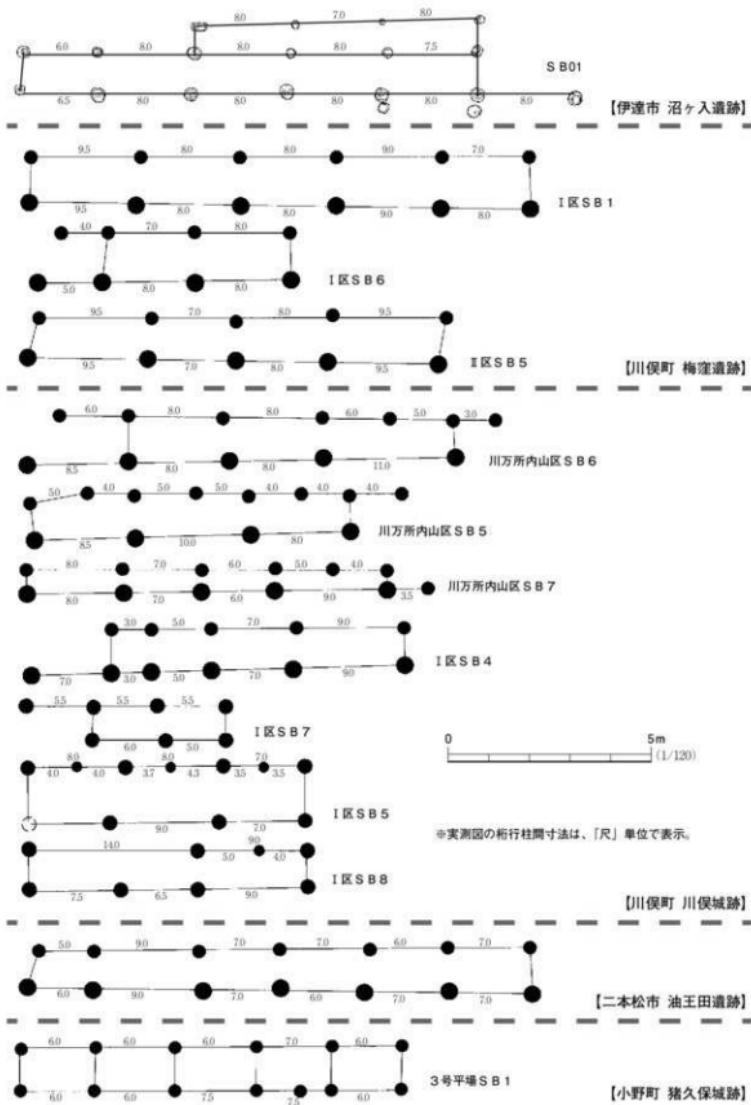
このうちA～Cは1号掘立柱建物跡にもあてはまり、本建物跡がこれまでの県内事例と確実に同一系譜であることがうかがえる。また、Dから導き出せる15世紀の年代観は、出土遺物の年代観と整合していると言えよう（図10上：8尺、図11左）。

- ④ 方形堅穴状遺構は、城館跡や津・宿場などの物流拠点に多く（鈴木2006他）、のことからも、本遺跡の性格が追認できる。
- ⑤ 1号掘立柱建物跡の北東位置に配置された控柱跡から、建物造営に伴う地鎮跡が確認された（図11-1）。陰陽道では北東を鬼門、反対の南西を裏鬼門としており（同図2・3）、古代から現代に至るまでそれらの方角の柱穴に銭貨を埋納する風習がある。本例は、前者の新事例である。

第2節 周辺遺跡との関連

最後に、福田遺跡および上ノ台館跡との関係に着目してみる（図7）。

福田遺跡は、沼ヶ入遺跡と隣接し、方形堅穴状遺構と焼土土坑が検出され、15世紀に武士階級が宴会儀礼を行ったことを示す、かわらけが出土している。また、上ノ台館跡については、縄張り図作成を依頼した室野秀文氏から、「上ノ台館跡は沼ヶ入・福田遺跡を見下ろす小国川対岸にあ



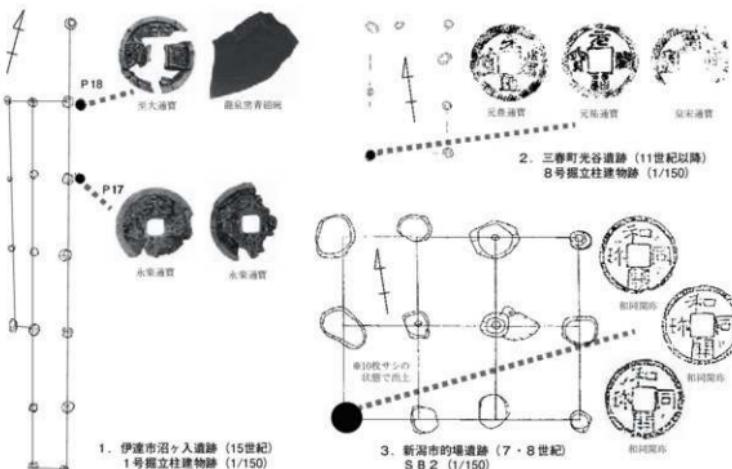


図11 地鎮

り、15世紀から16世紀までのいざれかの時期に臨時に構築された陣所や砦ではないか。」といふコメントをいただいている。

以上から、3遺跡は密接な関係だった可能性があり、このうち沼ヶ入・福田遺跡は、土塁や掘切の痕跡が無く、急斜面の立地でないことから、城館の関連遺跡とみるのが妥当と思われる。次年度以降の調査では、こうした視点を念頭に置いて調査を行っていく必要がある。

(菅原)

引用・参考文献

- 会津坂下町教育委員会 1992 「古館遺跡」「阿賀川Ⅱ期地区遺跡発掘調査報告書」
- 川俣町教育委員会 1996 「梅庭遺跡発掘調査報告書1」
- 川俣町教育委員会 2002 「河股城跡発掘調査報告書」
- 芝田 哲 1997 「石川県下の地鎮祭に開わる銭貨(古代～中世)」「出土銭貨」7 出土銭貨研究会
- 鶴谷和彦 1997 「中世の地鎮と銭貨」「出土銭貨」7 出土銭貨研究会
- 鈴木弘太 2006 「中世「堅穴建物」の検討－都市鎌倉を中心として－」「日本考古学』第21号 日本考古学協会
- 鈴木弘太 2015 「中世鎌倉の都市構造と堅穴建物」同成社
- 東北中世考古学会 2001 「掘立と堅穴」高志書院
- 鳥取県教育文化財団 2005 「S B 1の出土銭貨について」「南原千軒遺跡」
- 戸根与八郎 1997 「新潟県下の地鎮めと銭貨」「出土銭貨」7 出土銭貨研究会
- 二本松市教育委員会 1981 「油王田遺跡」
- 福島県考古学会中近畿部会 1997 「かわらけ編年」の再検討－11世紀～19世紀(その2)」「福島考古」38号
- 福島県教育委員会 1994 「猪俣城跡」「東北横断自動車道遺跡調査報告28」
- 福島県教育委員会 1992 「光谷遺跡」「三春ダム開削遺跡発掘調査報告6」
- 福島県教育委員会 2015 「福島県内遺跡分布調査報告22」
- 靈山町 1992 「靈山町史 第1巻通史」

第3編 上ノ台遺跡

遺跡記号 DT-KND
所在地 伊達市靈山町下小国字玉田
時代・種類 縄文時代の遺物包含層、中世以降
の木炭生産
調査期間 平成27年10月13日～11月25日
調査員 菅原祥夫・廣川紀子・由井文菜

第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況

上ノ台遺跡は、福島県伊達市靈山町下小国字玉田に所在する。地形的には、小国川北岸に広がる丘陵上にあたり、伊達市中心部からは南東に約5km離れ、太平洋沿岸の相馬市から中通り地方の福島市へ抜ける国道115号線(中村街道)のルート沿いである。周囲には、中世城館跡やその関連遺跡が認められるのが特徴で、本遺跡の一部は上ノ台館跡と重複し、小国川対岸には、武士階級の居住の場と推定される福田遺跡(第1編)および沼ヶ入遺跡(第2編)が位置している。

今回の調査区は、平成27年度の試掘調査の結果、新規登録された遺跡範囲の全体である。調査開始前の現況は山林であり、遺構検出面の標高は約162.0～176.0mを測る。

(菅原)

第2節 調査経過

今回の調査は、平成27年度の試掘調査で要保存面積が確定した900m²が対象となった。調査期間は、平成27年10月13日～11月25日である。工事側による立木伐採の完了を受けて、まず調査区内の雑木片付けと、ヤード内の器材庫・トイレ設置を行い、10月15日から、表土剥ぎおよび人力による遺構検出を開始した。表土剥ぎは放射線量の計測の結果、上位8cmを最初に除去し、その後、下位を剥ぐという2段階の工程を踏んでいる。

本遺跡は、深い谷地形に立地しているため、十分な安全帯を確保した上で作業を進めることとした。この結果、20日ごろまでには、急傾斜の北東側に遺構が存在しないことが判明し、以後は、傾斜の比較的緩やかな斜面中位～谷底の掘り込みが中心となった。

10月下旬になると、谷底から縄文時代の遺物包含層の輪郭が見えはじめ、斜面中位の傾斜変換点では木炭窯跡が検出された。そこで、作業員を二手に分け、遺物包含層に関しては2つのトレチを設定し、その土層断面と調査区南壁の土層断面を対比しながら、層位的に遺物を取り上げていった。出土点数は少なかったものの、時期的には縄文時代後期主体のまとまりがみられ、一定の成果を取ることができた。

一方、木炭窯跡は十字に土層観察用畔を残して掘り進めたところ、隅丸長方形の大型土坑タイプで、底面中軸に溝を有する構造であることが判明した。また、取り残しの木炭が並んだ状態で発見され(写真5-d)、窯詰め方法の一端を窺うことができた。

こうした経過を経て、11月上旬には調査終了のおおよその見通しがつき、10～15日に地形測量、24・25日に器材運搬を行い、翌26日には工事側に現地を引き渡して、本年度の発掘調査的一切を完了した。

(菅原)

第3編 上ノ台遺跡

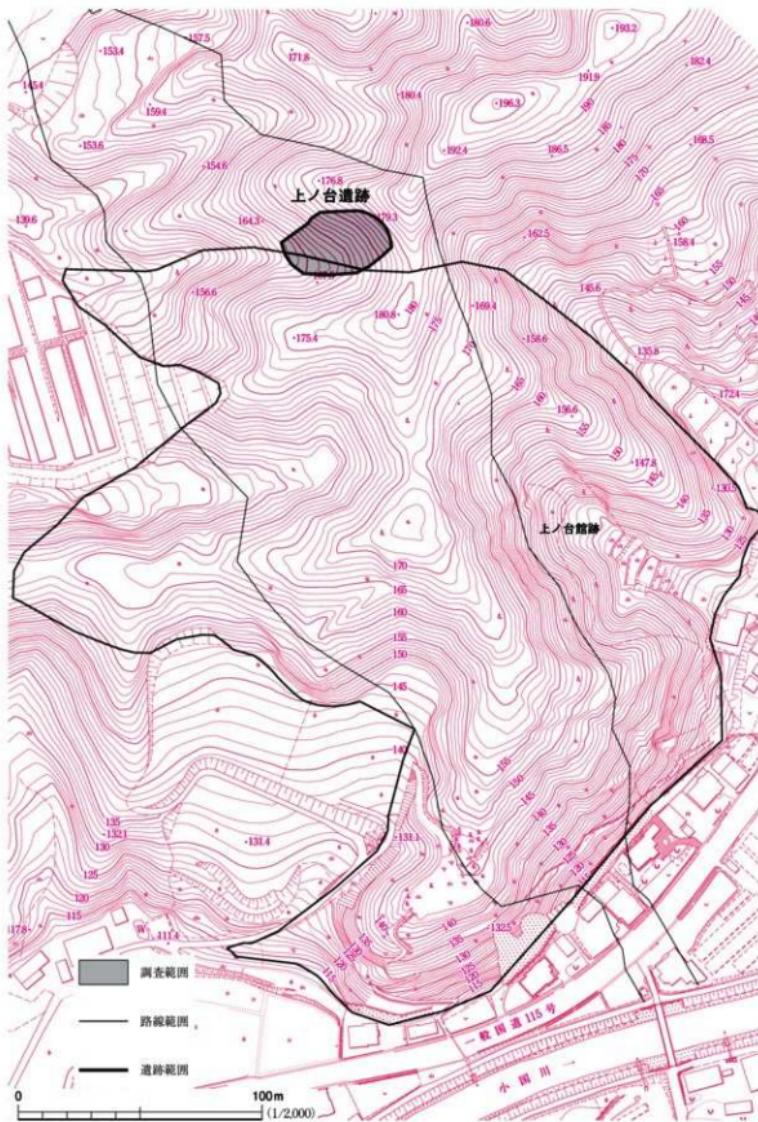


図1 調査区位置図

第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層

調査成果の概要

上ノ台遺跡の調査では、木炭窯跡1基、遺物包含層1カ所が検出された。木炭窯跡は、深い谷を開む南向き斜面中位の傾斜変換点に構築されており、中世以降のものと思われる。遺物包含層は谷底に形成されたもので、縄文時代後期主体の遺物が出土した。

なお、本遺跡の一部と重複する上ノ台館跡の関連遺構は、発見されなかった。

基本土層

基本土層は、色調・土質の諸特徴からL I～IVに分層し、さらにL IIについてはL II aとL II bに細分している。遺物包含層の該当するのはL IIIであり、図2上に平面分布範囲を網点で示した。

以下、説明する。

L I 黒褐色土(7.5YR3/1)である。現表土下の腐食土層で、調査区全体に分布する。層厚は10～15cmを測る。

L II a 褐色土(7.5YR4/4)である。遺物包含層のL IIIより一回り広範囲に分布し、層厚は、15～25cmを測る。

L II b 褐色土(7.5YR4/3)である。同じく、遺物包含層のL IIIより一回り広範囲に分布し、L II aより色調がやや暗く、L IIIとの漸移層と考えられる。層厚は10～25cmを測る。

L III 黒褐色土(10YR3/2)である。遺物包含層で、谷底に分布する。層厚は、10～23cmを測る。

L IV にぶい黄橙色粘質土(10YR7/4)である。基盤層で、層厚は50cm以上を測る。

(菅原)

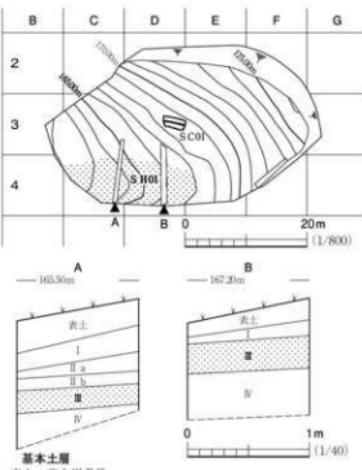


図2 基本土層

第3編 上ノ台遺跡

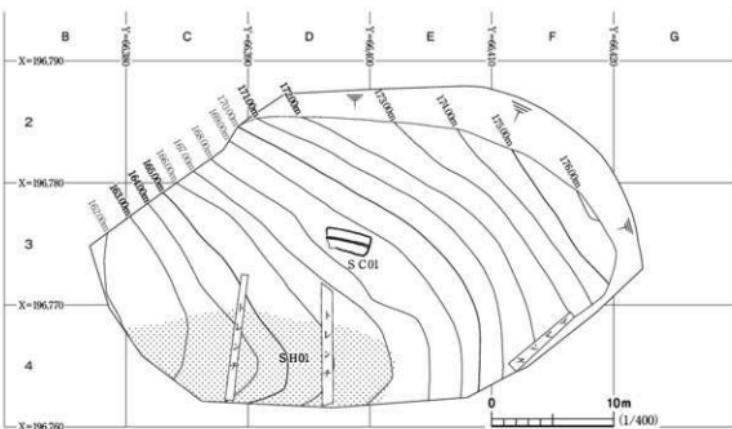


図3 遺構配置図

第2節 木炭窯跡

1号木炭窯跡 SC01(図4、写真3~6)

本木炭窯跡は、調査区中央のD・E 3グリッドに位置し、LIV上面で検出された。

平面形は隅丸長方形である。規模は、長軸3.64m、短軸1.57mで、深さは検出面から最大30cmを測る。壁は西壁から南壁の一部分が欠けており、北西角に厚さ1cm程度の赤褐色の焼土化範囲を確認した。底面は凸凹で、中央に長軸方向と同じ方向に走る1条の溝を検出し、南側に赤褐色の焼土化範囲、西側に焼土粒、炭化物粒の散らばりを確認した。溝の規模は、幅11~18cm、深さは底面から最大4cmを測る。

堆積土は4層に分かれ、このうち溝内に堆積する ℓ 4は、底面を覆う ℓ 2・3と明確に区別される。このことから、溝は遺構廃絶時には既に埋まっていたことがうかがえる。

遺物は、取り残しの木炭が南壁際および北壁際から底面中央に向かって、規則正しく並んで出土した(写真5-d)。

本木炭窯跡は、隅丸長方形の大型土坑タイプで、遺構内堆積土に被熱した天井部分の焼土塊が含まれていないことから、伏せ焼きにより木炭を焼成した遺構と考える。また、木炭の出土状況から、製品の窯詰め方法の一端がうかがえる。時期については、土器等の出土遺物がなく、特定はできないが、福島県内の調査事例から中世以降に営まれたと考えられる。

(由井)

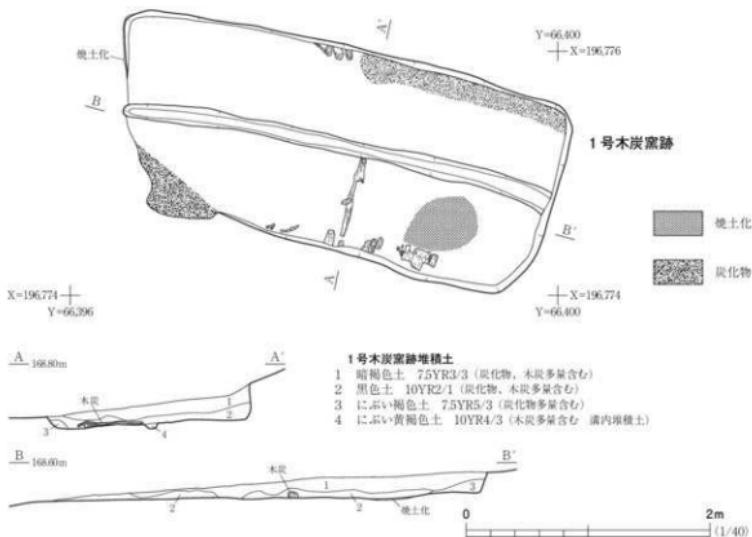


図4 1号木炭窯跡

第3節 遺 物 包 含 層

概 要

遺物包含層に該当するのは、谷底のC～E 4グリッドに形成された基本土層LⅢである(図2)。炭化物をごく少量含む黒褐色土で、縄文時代後期主体の土器片と石器を包含している。

調査方法は、上層を取り除いて平面分布範囲を捉えた後、谷底中軸に直交する方向で2本のトレンチを設定し、その土層断面と調査区西壁の土層断面を対比しながら、掘り進めていった。その結果、出土したのは縄文土器片35点、石器3点である。

遺 物 (図5・6、写真8)

縄文土器片6点、石器3点を図示した。

縄文土器

図5-1・2は口縁部片である。1は平口縁で、上端に連続刺突文が観察され、2は突起を有し、瘤と平行沈線が観察される。同図3・4・5・6は、体部片である。4・5・6は地文のみ、3は磨消縄文が観察される。いずれも、縄文時代後期後半に比定できると思われる。

石 器

図5-7は、珪質凝灰岩製の尖頭器である。下半部欠損のため不明だが、有舌尖頭器の可能性もある。平面形は柳葉形もしくは細形で、横断面形はやや厚手の凸レンズ状を呈する。同図8は、凝灰質砂岩製の打製石斧である。円刃両刃で、平面形は基部両側縁が弧状となる撥形を呈する。刃部に使用による長軸方向の線状痕が観察される。図6-1も、凝灰質砂岩製の打製石斧である。直刃両刃で、平面形は中央よりやや上部に抉りが弧状に入り、分銅形を呈する。

ま と め

谷底に形成された、縄文時代後期主体の遺物包含層である。出土遺物は少なく、谷を固むやせ尾根上から縄文時代の遺構が検出されていないことから、一定人数の定住生活に伴うものではないと考えられる。

(普 原)

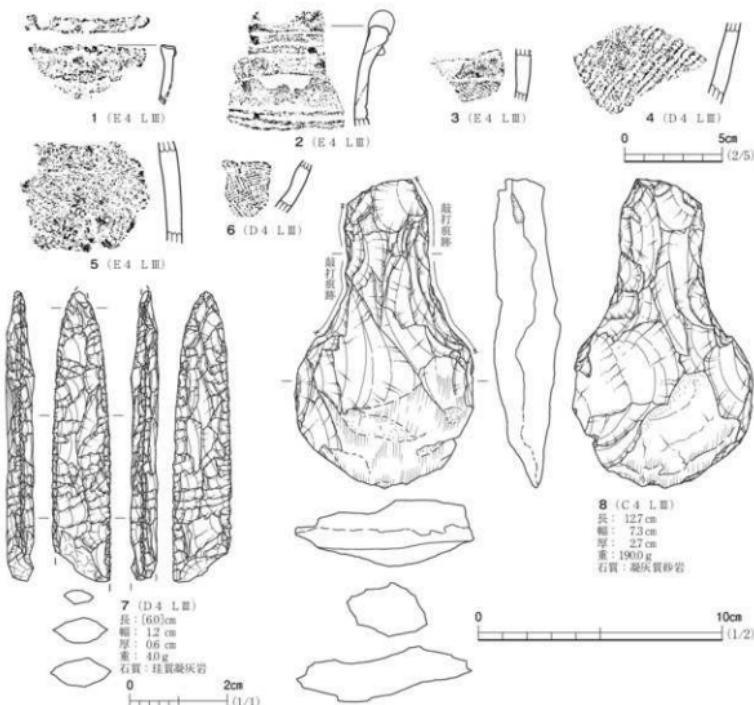


図5 1号遺物包含層出土遺物（1）

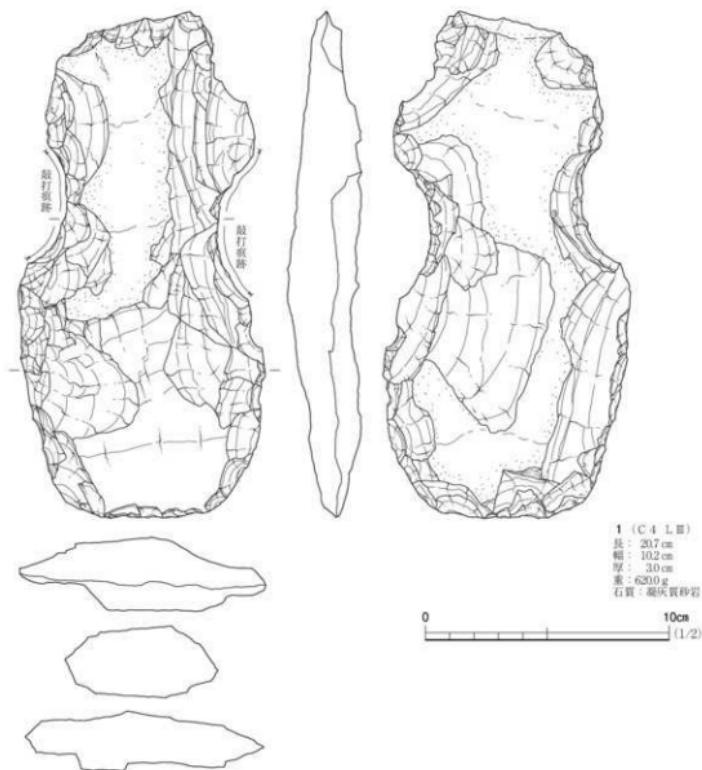


図6 1号遺物包含層出土遺物（2）

第3章 総括

上ノ台遺跡は、平成27年度の試掘調査で縄文土器片が発見され、新規登録されたものである(福島県教育委員会2016)。範囲の一部は、上ノ台館跡の北縁にかかっている。今回の調査は、遺跡全体が対象となった。

以下、成果を要約する。

- ① 谷底から、縄文時代後期主体の遺物包含層1カ所が検出された。遺物量は少なく、周囲のやせ尾根上に同時期の遺構が存在しないことから、一定人数の定住生活に伴うものではないと考えられる。序章第3節で述べたように、本遺跡周辺では縄文時代後期の集落跡が小規模・分散化する傾向がみられ、これに連動した現象と評価できるかもしれない。
- ② 斜面中位の傾斜変換点から、木炭窯跡が1基検出された。隅丸長方形の大型土坑タイプで、底面に溝を有している。時期は中世以降と思われる。
- ③ 中世城館跡の上ノ台館跡に関わる遺構は、発見されなかった。

(菅原)

引用・参考文献

福島県教育委員会 2016 『福島県遺跡分布調査報告書23』

塙町 1992 『塙町史 第1巻通史』



作業風景

写 真 図 版

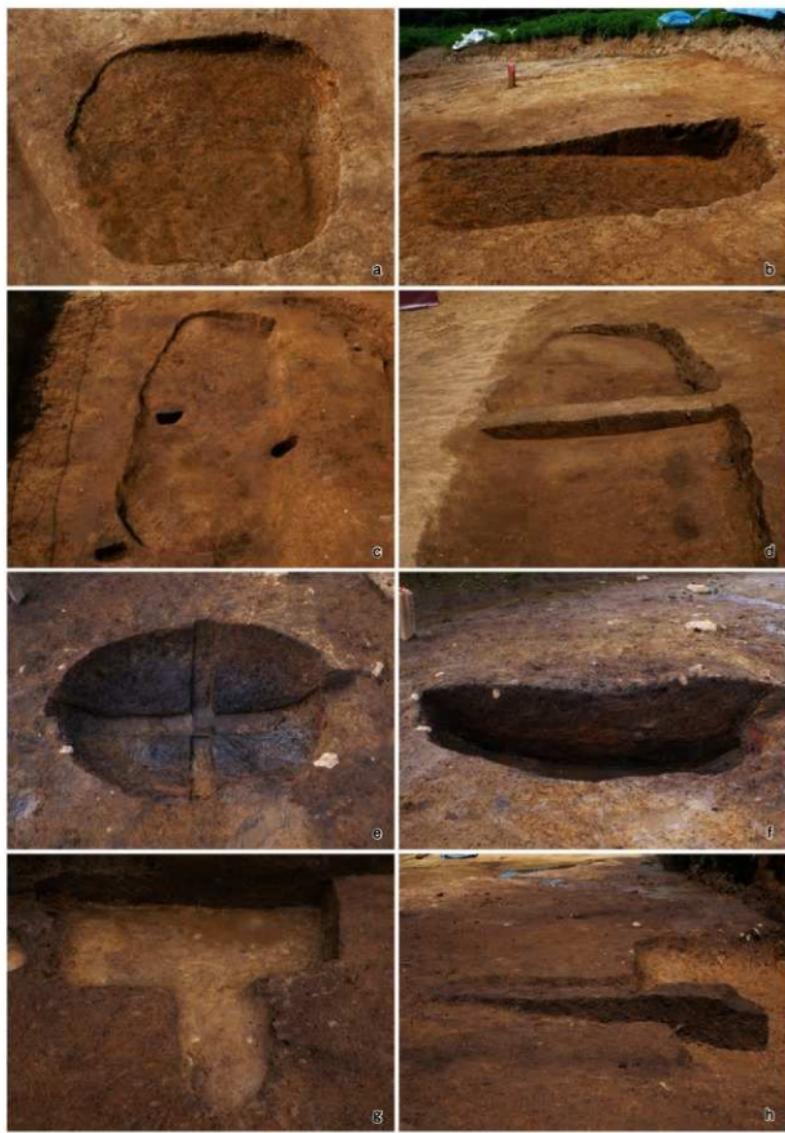
第 1 編 福 田 遺 跡



1 調査区遠景（東から）



2 調査区全景（北西から）



3 1~4号土坑

- | | |
|-----------------|-----------------|
| a 1号土坑全景 (南から) | b 1号土坑断面 (南から) |
| c 2号土坑全景 (南から) | d 2号土坑断面 (南から) |
| e 3号土坑全景 (南東から) | f 3号土坑断面 (南東から) |
| g 4号土坑全景 (西から) | h 4号土坑断面 (南から) |



4 1・2号溝跡全景（南から）



5 1・2号溝跡全景（南西から）



6 作業風景（南西から）



7 調査状況と出土遺物



a 表土剥ぎ（南から）

b 作業風景（北から）

c 2号溝跡出土遺物

写 真 図 版

第2編 沼ヶ入遺跡（1次調査）



1 調査区遠景（北から）



2 調査区遠景（南から）

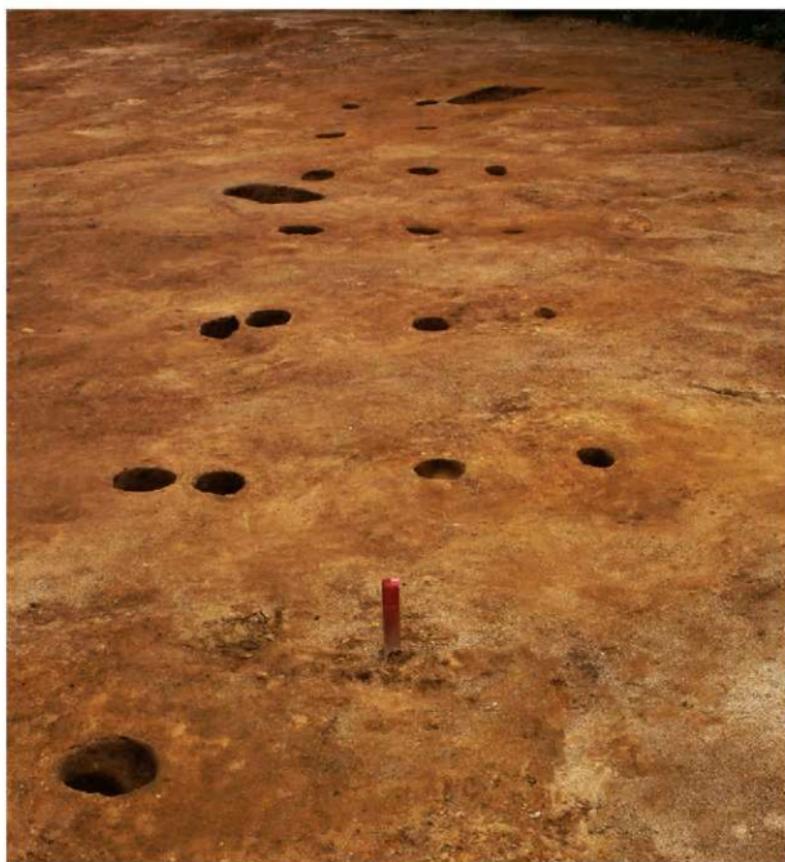
第2編 沼ヶ入遺跡（1次調査）



3 調査区遠景（南東から）



4 調査区全景（東から）

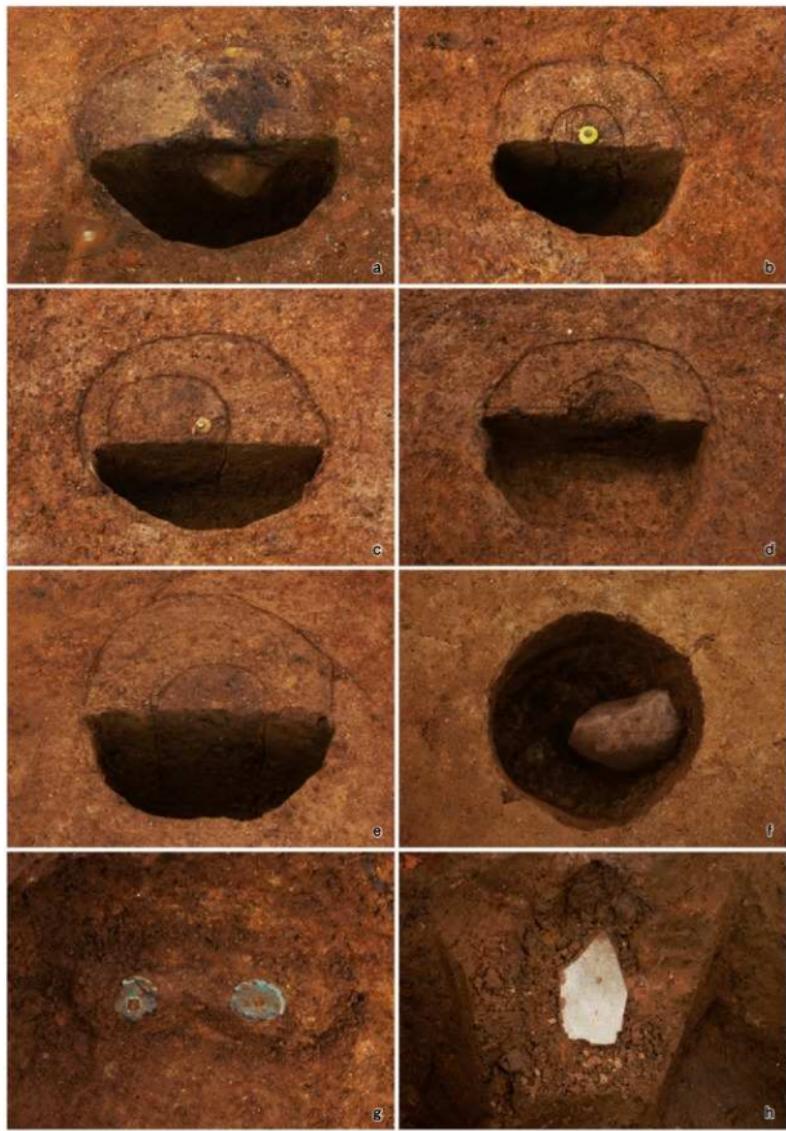


5 1号掘立柱建物跡全景（北から）



6 1号掘立柱建物跡全景（真上から）

第2編 沼ヶ入遺跡（1次調査）

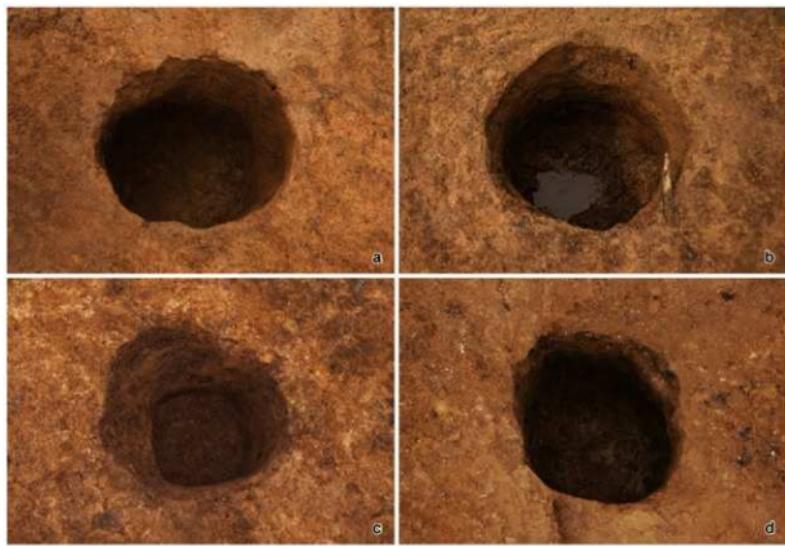


7 1号掘立柱建物跡柱穴

- a P 4断面（西から）
b P 6断面（西から）
c P 7断面（西から）
d P 13断面（東から）
e P 14断面（東から）
f P 18全景（東から）
g P 17遺物出土状況（東から）
h P 18遺物出土状況（南から）



8 2号掘立柱建物跡全景（東から）



9 2号掘立柱建物跡柱穴

a P 4 全景（東から）
b P 5 全景（東から）
c P 7 全景（東から）
d P 8 全景（東から）

第2編 沼ヶ入遺跡（1次調査）



10 1号土坑検出状況（東から）



11 1号土坑全景（西から）

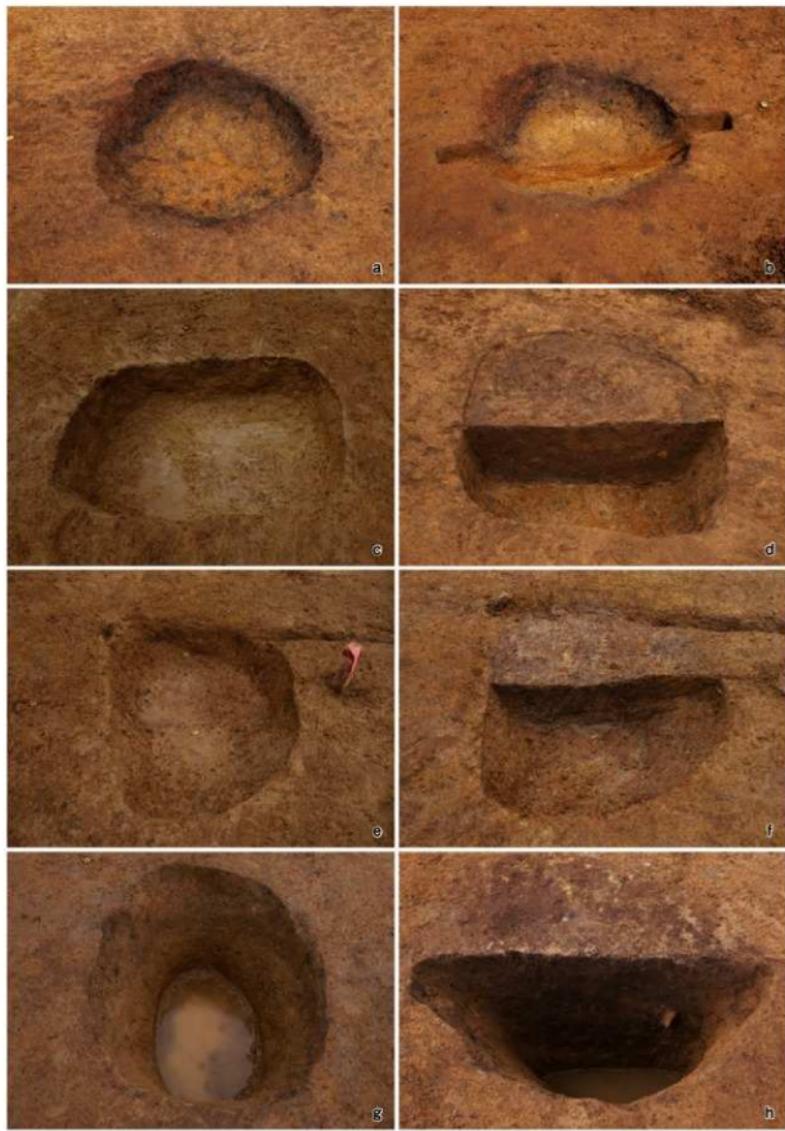


12 1号土坑全景（南から）



13 1号土坑断面（南から）

第2編 沼ヶ入遺跡(1次調査)



14 2～5号土坑

- a 2号土坑全貌(南から)
b 2号土坑断面(南から)
c 3号土坑全貌(東から)
d 3号土坑断面(南から)
e 4号土坑全貌(南東から)
f 4号土坑断面(南東から)
g 5号土坑全貌(東から)
h 5号土坑断面(南から)



15 6～9号土坑

- | | |
|----------------|----------------|
| a 6号土坑全景（南西から） | b 6号土坑侧面（南西から） |
| c 7号土坑全景（西から） | d 7号土坑侧面（南から） |
| e 8号土坑全景（東から） | f 8号土坑侧面（東から） |
| g 9号土坑全景（東から） | h 9号土坑侧面（東から） |

第2編 沼ヶ入遺跡（1次調査）



16 作業風景（東から）



17 調査状況と出土遺物



a 表土剥ぎ（南から）
b 作業風景（東から）
c 出土遺物

写 真 図 版

第3編 上ノ台 遺跡



1 調査前状況（東から）



2 調査区全景（東から）



3 1号木炭窯跡検出状況（東から）



4 1号木炭窯跡全景（西から）



5 1号木炭窯跡細部

a A-A'断面（東から）
b B-B'断面（南から）
c 濃断面（東から）
d 木炭出土状況（西から）

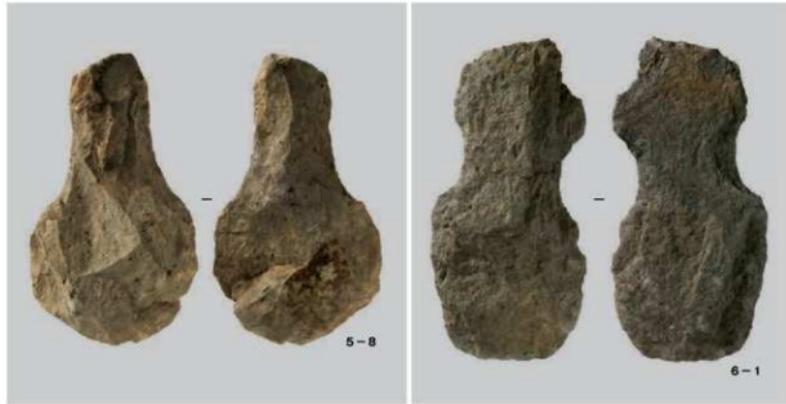


6 1号木炭窯跡断面（東から）



7 1号遺物包含層

a 作業風景（東から） b 断面（北から）



8 1号遺物包含層出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな 書名	いっぽんこくどう 115ごうそうまふくしまどうろいせきはくつちょうさほくこく5 一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告5						
シリーズ名	福島県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第514集						
編著者名	菅原祥夫 菊田順幸 廣川紀子 由井文菜						
編集機関	公益財團法人福島県文化振興財團 遺跡調査部 〒960-8115 福島県福島市山下町1-25 TEL024-534-2733						
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL024-521-1111						
発行年月日	2016年10月28日						
所取遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因
福 田	福島県伊達市雲 山町下小国字福田 田・後町	07213 00655	37°45'58"	140°35'28"	20150629 ~ 20150828	1,100m ²	道路(一般國道115号相馬福島道路)建設に伴う記録保存調査
沼 ヶ 入 (1次調査)	福島県伊達市雲 山町下小国字沼ヶ 入・御渡	07213 00656	37°45'54"	140°35'24"	20150727 ~ 20150930	1,300m ²	
上 ノ 台	福島県伊達市雲 山町下小国字玉田	07213 00659	37°46'15"	140°35'13"	20151013 20151125	900m ²	
所取遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
福 田	居住域	中世	土坑4基 溝跡2条	かわらけ	中世特有の方形堅穴状遺構に比定される土坑が検出され、15世紀のかわらけが出土した。		
沼 ヶ 入 (1次調査)	狩猟場	縄文時代	掘立柱建物跡2棟	水楽通寶	地鎮跡を伴う15世紀の掘立柱建物跡の他、方形堅穴状遺構に比定される土坑が検出され、福田遺跡との関係が注目される。		
上 ノ 台	遺物 包含層 生産	縄文時代 中世以降	遺物包含層1ヶ所 木炭窯跡1基	縄文土器 石器	縄文時代の遺物包含層、中世以降の木炭窯跡が検出された。		
要約	福田遺跡と沼ヶ入遺跡は、中世室町期の一体的な城館関連遺跡と考えられる。上ノ台遺跡は、縄文時代に捨て場、中世以降に生産場として利用されていた。						

*緯度度数値は世界測地系(平成14年4月1日から適用)による。

福島県文化財調査報告書第514集

一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告5

ふくしま
福田遺跡

ぬまがいり
沼ヶ入遺跡（1次調査）

かみのだい
上ノ台遺跡

平成28年10月28日発行

編集 公益財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部（〒960-8115）福島県福島市山下町1-25
発行 福島県教育委員会 （〒960-8688）福島市杉妻町2-16

公益財団法人福島県文化振興財団 （〒960-8116）福島市春日町5-54

国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所（〒960-8584）福島市黒岩字榎平36
印刷 不二印刷株式会社 （〒963-8041）郡山市富田町字権現林26-61
